

---

# その瞳は血に染まり

ぱんだまる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その瞳は血に染まり

### 【Nコード】

N3532BA

### 【作者名】

ばんだまる

### 【あらすじ】

異能の力、神の力を持って生まれた少女のお話。

私がもし、同じ力を持つ者に出会ったとしたら

数少ない同胞にあえてうれしい、という気持ちよりも

自分の忌むべき優れた能力が、他者も兼ね備えていることの恐怖。

世界の全てを思うがままに操れるであろう、この異能を

自分以外がもつことの恐怖を決してぬぐい去ることはできないだろう。

## 「序章・回想」

私にとって、最も幸いだったのは、その異能を気づかれることなく自我に目覚めたことだと思う。

私という存在を自分で認識できるようになった時、私が生まれてからすでに2年の月日が流れていたようだった。この2年の間に、私はこの世界の理の多くを理解していた。

そして、私自身が持つ性質と、“人”という生き物の性質を比較すること

如何に自分が人とはかけ離れた・・・姿形こそ

人のソレではあるが、もはや人とは異なる生命体であると、思い知らされた。

生誕から2年の間、私が犯してしまった、人とはかけ離れた異能の片鱗は

都会と離れたのどかな村の雰囲気のせいだろうか。村の人の目にはまだ”かしこい子”としか映っていなかった。

以後、私は”かしこい子”を越えることのないよう偽りながら15年間、人として時を刻むことができた。

それは私にとって、最も穏やかで、最も満たされた日々であった。

私にとって最も不幸であったのは、あの男より

10年も遅れて生まれてしまった、ということになるだろう。

私は自分の異能に気づいた時、一つの可能性を考えざるを得なかった。

この力を持つ者は、果たして私一人なのだろうか？

異能をもって生まれる原理が未だに解明できていない以上、他の異能者が存在する可能性を否定することはできない。

他の異能者が居たと仮定した場合、それは、私にとって敵か味方が私がもし、同じ力を持つ者に出会ったとしたら・・・。

私なら、数少ない同胞にあえてうれしい、という気持ちよりも自分の忌むべき優れた能力が、他者も兼ね備えていることの恐怖。世界の全てを思うがままに操れるであろう、この異能を自分以外がもつことの恐怖を決してぬぐい去ることはできないだろう。

同胞の異能者がどれほどの力をもつのかはわからない。

ただ、仮に同程度の力であると過程すれば、

その優劣は、異能の力を如何に使いこなすか、によって決まるであろう。

異能の力を引き出す理論を確立し、如何に早くそれを引き出す物質や道具を生み出すか。

人が解明した理には、これらの方法は何一つない以上、独学で導き出した理論のぶつかり合いになる。

当然、先に生まれるほど多くの理論を確立しているであろうし

私とあの男の違いは10年もあったことから、この差を埋めることは絶望的であったと言える。

いや、むしろその差が10年程度であったことを、幸運と思わなければならぬのであろうか。

私の生誕がもし、あと1年・・・いや半年すらも遅くとも

私はあの男の力に屈服し、隷属させられたであろう。

## 「一章・守護者」

その男、カシス・ミリキュアールが、世界を制したその日、私はちょうど17の春を迎えた時であった。

片田舎のトルトナ村には、世界を覆す大事件の影響は、まだ届いていなかった。

「おめでとう、我らが姫君！」

周囲を霊峰が囲み、花の咲き誇る窪地の中心に、古めかしい巨大な石碑が1つそびえ立つ。

この場所をトルトナ村の者は、神と声交わす地、と定め生誕の祝いの際に、ここで宴を催し神に昨年一年の命を御守り頂いたことの感謝と、次の一年の祈願を行うのが通例である。

人口が1000人に満たないこの村では、総出で村の者の生誕を祝う。そんな大勢の前で姫君等と気恥ずかしい俗称で私を呼ぶのがかれこれ、10年は守護者として私の生誕を祝ってくれた、フィルという”人間”の男である。

生誕の儀では、宴の中心である生誕者が、神と声交わす地において自らの守護者を報告し、その者に今年一年、自らを守る力を授けてもらう、ということになっている。

通例では、親族や恋人、夫婦同士が守護者となるが、私は親族がないため

不承不承、このフィルという人間に、10年間も守護されていることになってしまっている。

「フィル、今年も神託の享受をあなたにお願いできますか？」

フィルという男は、少々冗談が過ぎる点を除けばそれ程わるい人間ではないと思う。守護者とするのに不足があるわけじゃない。

村の青年団をまとめており、村の者たちからの信頼も篤い。

ただ、フィルは親が決めた、とある女性の守護者として、すでに神託を受けてしまっている。

同じ年頃の男女が守護者と生誕者の間柄を結ぶ場合は、俗に言う、許嫁に近い関係であることが多い。

フィルの場合もご多分に漏れず、という奴だ。

両親を無くし、これといった特定の”お相手”もない私は居候させてもらっているティンクル家に相談し、

新しい相手を見つかるまでの間、という条件付きで

ティンクル家のご子息であるフィルに守護者をお願いしている。

この村で、守護者を持たないことは村の掟として許されることではない。

守護者のいないものは、不幸を招く存在として、迫害されることになる。

いや、迫害されるものには守護者をつけられない、という方が正しいのだが。

そういった経緯で、今回もフィルは、二股の守護者と陰口をたたかれるハメになるわけで

いくら無神経な私といえども、多少なりとも心が痛むというものだ。

「今年も姫君のお目に止まる王子様は現れませんでしたか？」

トルトナ村の若者は、智勇誉れ高い者ばかり。姫君も家にばかり

こもらず

少しでもご見聞を御広めになれば、きっと良いお相手が見つかると思うのですが……。」

実際、私が村の男達の誘いをいつも断つて、家に籠もり

薬品のたくいをいじっているのは村人には周知の事実。

フィルの芝居があったこの言葉にも、周囲からは笑いがもれる程には。

そもそも、私が姫君と呼ばれたり、守護者を掛け持ちさせてまで特定の守護者をつくらず、年を重ねる”わがまま”が許されるのは私の母方の血筋が、古くは王家の地を引くと言われているからだ。ことの真偽は定かではないが、トルトナ村の者は皆それを信じているし

だからこそ、私は両親を亡くしても何不自由なく暮らしてこれた。

「ごめんなさい、でも成人の儀を行うまではフィル、あなたにお願いしたいの。」

成年に達する頃には、恐らく必要な理論は全て確立できるはず。

それまでは、この村のしきたりに合わせる必要があるため

一番気心のしれたフィルに、お願いすることになっている。

「我が姫君は相も変わらぬご様子。姫君に恋寄せ、智勇誉れ高き若者達。

残念ですが、やはり成人の儀まで姫を信じてまつしかないようです。」

周りから聞こえる落胆の声。どうも私はこの村ではそれなりの人気を集めることに成功しているようだ。

それは”王族”という血の魅力かもしれないし、私の人に似せたこの器が

人らしからぬ程、人らしい均整のとれた体だからかもしれない。

「それでは、僭越ながら今年も、私が務めさせて頂きます。」

さあ姫君。神託を授かりますので、こちらへ。」

フィルは巨大な石碑の前に立ち、こちらへ手を差し伸べている。

「フィル、守護者を務めてくれるのなら姫君はやめてくれない？」

フィルの手を取り、ややふくれっ面でそういう私。

「まだ、神託が下るまでは、守護者ではありませんので。」

さあ姫君、石碑に手を……。」

石碑には二つの大きな手形のような跡があり

左が守護する者、右が生誕者、二人が石碑に手をあて、

互いの関係を神に示し、神託を授かることで、

守護任命の儀が終わり、無事年を1つ数えることになる。

生誕前夜に、守護完了の儀を行ってから、ずっとフィルは

私のことを姫君、姫君と呼ぶ。村の者は皆そういうのだけでも、

フィルにまで言われるのは、なんだか違和感を感じて仕方がない。

でも、彼に言わせれば、それが成人までの守護代役たる者の分別と

いうものだそうだ。

私はフィルの手を取り、もう片方の手を石碑にあて、神託の儀を受けた。

何でもない、いつもの決まり文句。でも、このありきたりな言葉が

やがて、私にとって忘れられないものとなるのだった。

## 「二章・カケモチ」

「システイナ、頼まれてた石、集めてきたぞ」

窓の外をみると、フィルが牛車の荷台一杯に積んだ鉱石を指さし  
フィルがこちらを見ててを振っていた。

「ありがとう、こういうこと、フィルにしか頼めないから助かるわ。  
いつもごめんなさいね。」

合成物質を作る時に必要になる原料は、フィルにお願いして集めて  
もらうことが多い。

それなりに、使える鉱石を集める目利きができる者は村に多くない  
ので

そういう意味でも、フィルは私にとってなくてはならない人間とな  
っている。

「まあいつてことよ。これ、いつも場所に置いとくぜ？」

「ええ、お願い。後頼まれてたお薬、戸棚の所に置いてあるから。」

「おー助かるよー」

私は、様々な道具を作るために必要な材料を集めてもらう代わりに、  
ちよつとした、薬をつくつて、村の人に処方している。

技術水準を超えない範囲の薬しか作らないが  
時たま、秘薬と称して3世代ぐらいは先の妙薬を処方することもあ  
る。

原料の収集は欠かせないので、このぐらいの謝礼はしかるべきとは

思う。

「システイナはほんつとくに、家にこもりっぱなしだよなー。  
これじゃ、また来年も俺が守護者になりそうだよ……。」

荷物を運びおえたファイルが、玄関先に腰掛けて  
汗を拭いながら話しかけてくる。狭いこの家では残念なことに  
玄関から私の部屋が丸見えになってしまう。

「成人の儀までは、ファイルをお願いっていつてるじゃない。  
まだまだ私は勉強しないといけないことが、山ほどあるから、  
守護者を見つける時間は当分とれそうもないのよ。」

「システイナは、頭いいからなー。  
でも、成人の儀までっていつても、守護者なんてすぐ見つかるも  
んじゃないぜ？」

早いうちから色々な人と出会ってだなあ……。」

「そうね……。でも、守護者を見つかることばかりが人生じゃな  
いでしょ？」

「それはそうだけど、おまえ……。  
なあ、もしかして、村をでるつもりなのか？」

この村では守護者のいないものは、不幸を招く存在とされるため  
守護者を持たない者を村は認めていない。  
守護者をかけもちさせてでも、そういう者をださないようにしてい  
る。

ただ、成人の儀を過ぎてしまうと、なかなか”カケモチ”というの  
も難しくなる。

婚姻関係の守護者とは別に、守護する者を持つことは俗に言う、愛人のような関係と見られることもあるからだ。

そのため、成人まで守護者をみつけれず、”カケモチ”で凌いできた者は

やがて村に居づらくなり、村をでていくことが多い。

「うん・・・どうだろう、まだ決めてないんだけど・・・。」

この村でできることにも限りがある。

やがては、外へでていかなければならぬだろう。

「システイナぐらい頭がよければ、街でもやっていけるのかもしれないけどさ・・・。」

でも、システイナは俺たちのお姫様だから・・・。やっぱり俺はこのまま村にいてほしいよ。」

「たぶん、私はこのままずっと守護者を決められないと思う。」

村の人がダメってわけじゃないけど、私にとって特別な人は見つからない気がするの。」

恐らく私は、ただの人間を、特別な存在として認めることはできないと思う。

自分の力に酔いしれた、くだらないエリート意識なのかもしれないけど。

「俺が見つかるまでずっと、守護者をしてやるからさ。気長に探せばいいよ。」

成人の儀がすぎたからって、すぐに村をでていくなんで、言わないでくれよ?。」

「ばかっ……。そういうこと言っていると、ソニアに怒られるよ?」  
ソニアっていうのは、フィルが親に決められて守護者になった、例の許嫁だ。

「ソニアだっておまえがいなくなるぐらいなら、俺が守護者になるって言うっても賛成してくれるさ。」

私は研究の手をとめ部屋をでてフィルの隣にそつと座った。あまり人には聞かれなくなかったのかも知れない。

「フィル、気持ちはともうれしいけど  
ソニアの前では、そういうこと言わないでね。」

「なんでだよ?」

フィルは私の顔をみて食いかかるように問いつめてくる。  
私は態度を変えず、ただ前をみて静かに答える。

「女の子ってそういうものよ。  
今でも肩身が狭いのに、成人の儀をすぎても掛け持ちさせたらソニアに合わせる顔がないわよ。」

「あんなぁ……。そんなの気にするなよ。  
俺とおまえの仲じゃないか。言いたい奴には言わせておけばいいわ。」

「フィル……。ソニアの立場を考えてあげて、っていつてるの。  
私は独り身だからどう蔑まされようとかまわないけれども  
あなたやソニアはそういう訳にはいかないでしょう?」

「システイナ・・・俺はおまえの力になりたいんだ。  
周りがどう言おうが関係ないんだよ。」

俺なりにおまえのためにできることをしてやりたい。」

「・・・ありがとう、フィル。」

でもね、そういう気持ちは、私にはもったいないの。

その言葉はソニアにかけてあげて。彼女、そういうの喜ぶと思う  
わよ。」

人ではない、私には彼の好意を受け取ることすら・・・。

「あ、あのな！別に・・・別に、おれは、ソニアとは・・・。

おれは・・・おれはソニアよりっ！」

「フィル！」

「っ・・・。」

勢いよく私の手をつかみ、”何か”を言いそうになったフィルを  
私はあえて牽制し、言葉を途切れさせる。

フィルは、少し興奮しすぎている。

「フィル、この話はもうやめにしましょう。」

お薬、はやくお父様にもって行ってあげて。」

「あ、ああ・・・す、すまない・・・。」

最後にフィルは心底すまなそうに私にそう言い残し、  
いつもの笑顔を少しだけ見せて、去っていった。

ソニアとの婚約について、彼があまり乗り気ではないのは知っている。

ソニアの親は村の有力者で、村の青年団で活躍しているフィルを”娘に相応しい人物”と目をつけフィルの両親に話を持ちかけた。

ソニアの親に大きな借りのあるフィルの両親は、フィルの気持ちも聞かずに

二つ返事で承諾してしまった。今さら、この話を断ることはソニアの両親に

恥をかかすことになるし、フィルの両親の立つ瀬もない。

フィルとしては、乗り気じゃないが、断ることもできない、といった感じのようだ。

もし、フィルがソニアの守護者じゃなかったら・・・。

いや、よそう。もう過ぎたことを論じるのは意味がない。

フィルはソニアの婚約者で、私はただ、お情けで彼に守護者となってもらっているのだから。

### 「三章・神という存在」

その日、ようやくこの村は、世界でおきた事実を知ることになる。

「となり街には、首都からの難民者が雪崩れ込んできて

街の路地にまでテント貼って生活してる奴がいるらしいぜ？」

「難民はこの国だけで10万人とか言ってるからな……。

そのうち、食料求めて、この村に雪崩れ込んでくるんじゃないか  
？」

広場で水をくんでいると、村の人たちが騒ぎ立てているのがみえた。

「あの、何かあったんですか？」

「ああ、姫様！聞いてくださいよ！

戦争ですよ！戦争が起こったんです！

首都は壊滅しちゃって、主要な都市もほとんどがさんざんな状態  
らしいです！

首都からの難民がもう、隣町まで逃げてきてるらしいですよ！」

「村長の話だと、この村にも、援助物資を送るよう命令がきてるっ  
ていうぜ……。」

「この村のどこにそんな蓄えがあるっていうんだよ！

日頃はさんざんな扱いしておいて、困ったときだけ虫が良すぎる  
ぜー！」

戦争……？たまたまに伝え聞いている世界情勢では

この国がそれ程緊迫した状況とは思えなかったんだけど……。」

「どの国と戦争をしたのかわかりますか？」

「いや、それがまったくわからないそうなんですよ。」

とにかく、ものすごい兵器を使っている、機関銃もミサイルも効かないし

戦車や戦闘機が紙くずみたいに、一瞬でぺちゃんこにされるって話らしいです。」

「俺が聞いた話だと、相手はたった一人で数千の戦車や戦闘機、何万つていう武装した兵隊を相手にしたらしいぜ！」

「おいおい、たった一人だって！？それはいくらなんでもないだろう！」

もし、この村に伝わるまでに真実がねじ曲がっていないければ、

私は最悪の事態を想定せざるをえない。

彼らの話を実現できる程の軍事組織は人の技術水準では実現できない。

もし、これらが真実であれば、それは異能の力を持つ者の仕業である。

異能者の力であったとしても、明らかに私よりも先んじた者の仕業になる。

技術面もそうだが、それを実用化し、実際に運用する所まで行うにはそれ相応の時間がかかる。少なくとも私が同じことをしようとすれば後5年以上は時間がかかるであろう。

「お、おい……み、みる！」

空に何かが……。」

そうして、誰かが指さした先をみると、そこには空の上にくっきりと、人の姿が浮かび上がっていた。

大気の雲よりもやや濃く鮮明な映像が浮かび上がっている。

大気映写技術・・・それも、かなりの広範囲で濃度も濃い。

私も構想だけは試みたことがあるが、かなり難度の高い技術が要求される。

これで確信できた。あの男は間違いなく私と同類の異能者だ。

持ち合わせている技術とそれを実現するための資材の準備、

先ほどの戦争の話を書く限り私より7年は先んじていると思う。

大気に鮮やかに映し出された人影はゆっくりと、不適に世界を見下し話し始めた。

大気映写技術だけでは声まで通すことはできないのだが

音源用の小型スピーカーポッドをかなりの広範囲にばらまいているのだろう。

「これを見ている、世界中の人間達に、まず、事実を報告しよう。

たった今、世界中の軍事施設、行政機関。その全てを私が制圧した。

私はまあ有り体に言えば、君たち人間によっては神のようなものだ。」

そうして、しゃべるその男の下には、各地の戦いの様子と思わしき映像が浮かび上がっていた。

確かに、それを見る限りではまさに、圧倒的で軍隊等は何の役にもたっていないかった。

「信じられない者も多いかもしれないが、それも結構。いつでも逆らってくれてかまわない。

君たちでは1000年かかって私にあらがう兵器をつくることはできないだろう。」

その男・・・年は30程度だろうか。不老の技術を開発していたらわからないけど・・・。

あまりこういう場面での代理は考えにくいので、恐らく異能者本人であると思う。

私とは人種が違うようだけど、1つだけ共通点があった。

その男の眼は血の色に近い、深い紅に染まっていた。私と同じ希少な瞳の色。

これは、果たして偶然なのだろうか？

「私の名は、カシス・ミリキュール。

これから、君たち人の神として君臨する名だ。覚えておくの良い。

」

そういつて、大気に映し出されていた映像が消え、かすかな揺らぎと共に、元の青空が映し出される。

同じ異能者の存在を想定はしていたけど、まさかこれ程の開きがあるなんて・・・。

「システイナ！無事か！？」

今も映像の消えた青空をポカンと見上げる人々が集う中、人混みをかきわけて、ファイルが駆けつけてくる。

「ファイル・・・。大変なことになったわね・・・。」

「ああ・・・今は本当なんだろうか・・・。  
空に人の絵が映ったことも、その中でみた、首都壊滅の姿も  
すぐには信じられないことばかりなんだが・・・。」

「そうね・・・そうかもね・・・。」

でも、フィル・・・これは事実なのよ。

現に、首都は壊滅して、その難民は隣町まできているのだから。」

「ああ・・・そうだな・・・。」

これから・・・これからどうなるんだろうな・・・。」

「そう・・・ね・・・。」

先をこされた以上、私は抗うか、隷属するか。

選ばなければならぬ・・・。」

あの男とどう対峙するかを・・・。」

#### 「四章・無秩序という支配」

たった一日で瞬きするまもなく終わってしまった、世界中の制圧劇。制圧対象となった所は場所によっては草木一本残らず灰となり完膚無きまでに叩きのめされた。

人をゴミのように扱った、この制圧劇は、各地で激しい反発をよんだ。

世界中で神を名乗る男に対して、暴動が巻き起こり、わずか一週間後には、世界中の反発組織が決起する、世界暴動が勃発した。

しかし、その暴動は1時間もかからずに鎮圧されることになる。神の名乗る男が造った自走型戦闘兵器は圧倒的な性能をもって暴動に参加した人々を次々に惨殺していった。

トルトナ村からは暴動への参加者はでなかったが隣町や、そこに逃げ込んでいた難民の多くは、暴動に参加し、帰らぬ人となった。

この世界暴動は、人では神には傷一つつけられない。神に逆らっても、死以外は何も残らない。そういう絶望を人々に植え付けた。

これより、以降、まさに地獄と言うべき混沌の時代が始まった。

自らを神と名乗った、カシス・ミリキュアルは、

神の眼と称する監視用の自律型ポッドを世界中に配備して

人の神への反抗を監視しているが、人の生活や、人同士の問題に関しては何も行わなかった。

旧体制の軍事施設、政治機関は全て破壊され、関係者もほとんどが惨殺されたため  
実質、今の世界は無政府状態のまま、何十億という人が生活していることとなる。

治安はみるみる低下し、戦火による食料不足から残された食料を人同士が奪い合う時代へと移り変わった。

トルトナ村自体は昔から自給自足で生活しており、戦場とも離れていたため、しばらくは戦火の影響もなかった。

しかし隣町には首都からの難民が多く溢れて日々食料不足で苦しんでいる。

彼らの一部が徒党を組んでトルトナ村へ食料を奪おうとすることが次第に増えてくるようになる。

大抵は自警団がみつけ対処してきたが、数が多く相手が武器を持ち始めてからは

村人の中に怪我人もでてきたため、村で今後のことについて話し合いがなされた。

「あいつら、日に日に凶暴になってきやがる！」

「このままじゃ村の食料はあいつらに強奪されちまうよ！」

「とは言え、彼らも悪しき神による被害者だからな……。」

隣町の食糧不足もかなり深刻だと聞くし、村の余っている物資は分けてあげるとかして、話し合いで解決できないかな？」

「甘い甘い、物資なんて渡したらつけあがるだけだ！」

倉庫がからっぽになるまで絞られるよ！」

隣町には難民がどれだけ流れてきてると思っっているんだ！」

村の会議には、村長はじめ、村の有権者達、自警団のリーダー格が

参加している。

私は、一応村で一番の博識、ということでもこういう場には決まって参加させられる。

「なんで・・・なんでこうなんだ・・・。」

人同士が争ってる場合じゃないのに・・・。」

フィルは悲しそうに眼を背けている。

私はあの男と同類だからなのか、人が死に、神と名乗る者に蹂躪され、

行き場のなくなった怒りで自ら争い合ってる姿をみても、特に何かを感じることはなかった。

ただ、人とはそういうものではないのか、と思うだけだ。

でも、何故かフィルの悲しそうな眼をみていると、私も少し悲しかった。

「ま、またあの映像だ！

空に人が！！」

外で見回りにたっていた村人が空を見上げて叫んでいた。

その声をきいて、皆顔を見合わせ、外へと飛び出して大空を見上げる。

そこにはこの世界が制圧された時と同じ、

大気映写技術を用いて、神を名乗るあの男が、鮮やかに映し出されていた。

「ここ最近、反乱もなくなり、そろそろ私に逆らっても無駄だということだ」

無知な君たちにも理解できたようで、うれしく思っている。」

まあなんとというか、私はそんなことを言うために  
10秒投影するだけでも、この村1つ買えるぐらいの手間がかかる  
大気映写技術を使う、この男の行動にあきれていた。  
しかも、いちいち身振り手振りが大きい、オーバーアクションな所  
がある。

この男、まるで遊びでやっているようにも見える。

私にとってはあきれれる材料以外にはなりそうになかったが  
普通の人の感情をあおるには十分だったようだ。

「あのやろう、何様のつもりだよ！えらそうに……。」

偉そうと言うのには賛成だが、彼が何様かと言えば、

この世界の支配者様なわけで、それに関してはどうしようもない事  
実である。

その支配者が、ようやく本来の目的を告げた。

「そんな物わかりのいい君たちに、1つ提案だ。

私は君たち人間には興味がないが、紅い眼をもつ者には興味を持  
っている。

そう、この私と同じ深い紅色だ。」

そういつて空に映し出された男は自分の眼を指さした。

大気の色に混じっても、それとわかる、深い紅色をした目がこちら  
を見据えている。

その瞬間、私は思わず自分の眼に手をあててしまった。

特異な所を少しでも減らそうと、カラーコンタクトを絶えずつけて  
いたため

紅い眼と聞いても、私の方を振り向く者はいないのだが……。

「この紅い眼をもつ者を、私に差し出せば  
その者には、いくつの特権を授けてやろう。  
人が人を支配するためには必要なもので、私には不要なものだ。」

世界を無秩序に陥れ、秩序をエサに人の協力を取り付ける、か。

「ああ、そうだな・・・。」

私に憎しみを持つ者は、あいつには渡すまい、と  
紅い眼を持つ者を殺してしまうかもしれないな。

だが、私はそれでも一向にかまわない。

人に殺される程度のものには興味はないので、な。」

普通の人間は、殺意をもった同族から完全に自分を守りきることは  
できない。

にも関わらず人に殺される程度、と言い切るということは、つまり  
紅い眼を持つ者が、自分と同じ能力者である、とあの男は考えてい  
るのだろう。

確かに私やあの男であれば、人程度に殺される、といったことはあ  
りえない。

ただ、私はこの異能が色素にどのような影響を及ぼすかは、わかっ  
てはいない。

色素が抜けやすい、ということはあるが、そこまでだ。  
だが、あの男はどうも確信しているようでもある。

「・・・システイナ、ちょっと話がある。」

気がつくのと隣にいたフィルが耳元でそつとささやく。

まあ今の話を聞いたら無理もない、か・・・。

「わかった、いつもの場所にて。後で行くわ。」

それを聞くと、フィルは軽くうなずいてその場を離れて行く。

空にはあの忌々しい男の姿はもうなく、透き通るような青い空が広がっている。

私の心は、もうこの空のような晴れ晴れとした気持ちになることはないかもしれない。

先ほど、私に声をかけた時の思い詰めた顔のフィルを思い出して、そう感じた。

## 「五章・決別」

私とフィルは、ちょっと大きな声では言えない相談をする時、決まって生誕の儀を行ったあの場所に集まって話をする。

あの場所が、私たちをつなぐ唯一の絆でもあるし私が人の世界に縛られているただ一つの楔でもあるかもしれない。

日はやや傾き、かすかに赤みをましてきた。

夕日と呼ぶにはまだ早い、そんな淡い赤に照らされフィル・ティンクルという男が石碑の前で立っていた。

「さて、どうしたものだろうな。」

私の顔をしばらく眺めて、フィルはそうつぶやいた。何が、というのは聞くまでもない。

彼は、カラーコンタクトを外した私の眼の色を知っているのだから・・・。

フィルは私と目を合わさずに話し続ける。

私と視線を合わせるのを避けているだけなのか、私の眼の色を見ないようにしているのか・・・。

「もう、5人から相談を受けた。

みんなそんなにはつきりと覚えているわけでもないし、ちゃんと見たって奴は一人もない。

でも、確認しておいた方がいいんじゃないの？って奴さ。」

人前ではカラーコンタクトを外さないようにしていても、

ふとした時に見えてしまうことはある。それを思い出した者が、だからといって直接聞く勇氣もなく、守護者であるフィルの所に相談にきているってわけだ。

「それで、青年団を代表してフィルさんが  
お姫様にお伺いをたてに来た、ってわけだ。」

私は軽く冗談めいて、そう答えた。  
自分で言っておいて、なんだろう・・・心が痛い。

「一応、俺も覚えてないってことにしてるし、  
まあ確認したって事実が必要なんだよ。  
とはいえ、俺だって、いつまでごまかせるかわからないしな・・・」

ごまかす・・・その言葉が私の心を傷つける。  
彼にそんなつもりはないのは分かっているのだけだ。

「別に・・・ごまかす必要なんて、ないんじゃないの。」

「そういうわけにいかないだろ・・・。  
おまえの眼のことが知れたら、あの変な男に連れて行かれるわけ  
だぜ？」

あんな男の所へ行ったら、何されるかわかったもんじゃない。」  
「そうかしら。割と想像はつくけど。」

私でも、同じことをする。同じことを考える。  
私たちにとっては、同種こそが、最も懸念される問題。

「フィル、あなたはどうしたいの？」

私はカラーコンタクトを外し、あの男と同じ色の眼でフィルをまっすぐ見つめる。

「この眼をもつ者をさしだせば、あの男はこの世界で人を支配するために必要な、兵器や物資を用意してくれるはず。それを使って、フィル。あなたはこの世界の新しい王になることもできる。」

今まで眼をそらしていたフィルが、私を・・・紅い眼を見つめ返す。

「システイナ！俺は何もそんなつもりで言ってるわけじゃない！」

「でも、あなたが言ったことよ、フィル。いつまでごまかせるかわからない、と。

やがて、誰かに見つかりあの男に引き合わされるのなら・・・。それはフィル。あなたの手で行ってほしい。それが私の望み。」

カラーコンタクトで覆われた脆いごまかし。

そんなものは、すぐにあばかれる。覚悟を決める時がきたのだと思う。

「簡単に諦めるなよ！もっと考えればなにかあるはずだ！」

それに、俺の所に相談にきてる奴らだって、別にシステイナを売り渡そうなんて

考えてるわけじゃないさ。逆に心配して声かけてくれてるわけで・・・。」

あきらめ・・・というのかしら。

これはもう、結果の決まっちゃってしまっているゲーム。世界は秩序をもとめ、その秩序は紅い眼という生け贄によって得ることができる。

大気映写によって、そう宣伝されてしまった今となっては……。

「フィル、これはあきらめ、とかそういう問題じゃないの。

噂には聞いているでしょう。難民、飢餓、貧困、犯罪。

この世界がいまどういう状況にあるのか。」

「それがいつたい今の話となんの関係があるんだよ！」

「フィル、世界は……人は統治者を求めているの。

誰かが世界を統治し、秩序をもたらさなければ、人の世界は終わってしまいます。

それが、例え、偽りの神によってもたらされる汚れた力であったとしても……。

それによって、世界が救われるのであれば、それをなさねばならないわ。」

「だ、だからって、おまえをあの人に差し出せっていうのかよ！」

「そうね、でもどうせなら、私はあなたにお願いしたい。」

「っ……！！」

「なんで……なんで……！！」

「もう一度聞いわね、フィル。

あなたはどうしたいの？」

「おれは……おれはっ！」

私は、黙ってフィルの言葉を聞く。

彼の意志で、世界を混乱から救ってほしい。

そうすれば、私は安心して、あの男と対峙することができる。  
かなわないまでも、そう・・・あきらめることなく。

「おれは・・・おれは・・・おまえの守護者だ。

おれは・・・おまえを守りたい・・・。

守れる・・・守れる力が・・・ほしい・・・。」

「そう・・・そういう考え方もあるわね。

私をまもるための力、手にはいると思うわ。」

「でも・・・でもそれじゃ、矛盾してる！

おまえを守りたいのに・・・その逆のことをしないといけない！」

あの男が人に分け与える兵器や物資などでは、到底あの男自身を  
うち倒すまでのものにはならないだろう。

でも、あの男から私を守る手助けにはなるかもしれない。

私とあの男の致命的な差をわずかも埋めてくれるかもしれない。

「あなたが力を持たないまま、私があああの男の前に連れ去られたなら、  
私はきつと、諦めてしまう。ああもう助からないのだと・・・。

でも、あなたが、力もち、私を守ると誓ってくれるのなら。

私は諦めることなく、それを待つことができる。

わずかであっても、その望みを糧とすることができる。」

「システイナ・・・おれは・・・おれは・・・。」

「フィル、汝、守護者としていかなる時もその身をつくして

万難を排し、我が身を守り抜くことを誓いますか？」

私は石碑に手を当て、つい先日の儀式と同じ言葉を繰り返す。  
フィルは、ゆっくりと石碑に手をあて、彼もまた同じ言葉を繰り返す。

「我、汝を守る盾となることを誓い、守護の力を授かり賜う。」

そうして、私たち二人だけの守護の儀式は幕を閉じた。

## 「六章・神の居城」

その男、カシス・ミリキュアルが住む場所は人の眼からみれば、贅沢の粹を極めた、

しかし同種の眼からみれば、技術力を誇示した建造物で溢れていた。

黄金の庭園、ダイヤモンドの外壁をもつ巨大な城。

そこに行き交う、裸体の奴隷達。

太古の王族でもここまで酷くはないだろう、という行き過ぎた贅の数々。

黄金やダイヤモンドは、その量からみて、通常の製法ではなく、原子変換技術で大量に量産されたものであることは容易に想像できる。

また、裸体の奴隷達も、外皮は人のそれに近いが大半は人造生命体だと思う。

何故って、それらの生命体が片手で軽々と持ち上げ運んでいる

巨大な黄金の固まりは10メートル四方を越えている。

これを支えることは、人体の構造からは不可能と言っていいたいだろう。

ここを見ただけでも、あの男が私より技術的に優れていることは認めざるを得ないし

向こうの目的もそれを知らしめるためであろう。

「こちらでございませす。どうぞ足下にお気をつけて。」

私を案内しているのは、そこらをうろついている馬鹿力の人造生命体ではなく、

普通の人間のような。なぜあの男に従っているのかはわからない。

力づくで強要されているかもしれないし、打算的に取り入っているだけかもしれない。  
他にもちらほらと、人造生命体の中に普通の人紛れているようでもある。

「ねえ、ここには何人ぐらい、あなたみたいな普通の人がいるの？」  
私はそれともなく聞いてみた。

あの男がどれぐらいの規模で人を囲っているかも気になる所ではある。

「申し訳ありません。主の許可なく問いに答えることはできません。」

しかも従順。あの男、どこまでなにやつてるんだか……。そこからは会話もなく、やがて城の入り口がみえてくる。

「ここでお待ちください。まもなく主が参りますので。」

外でお出迎えとは……。友好的でないことだけは確かなようだけどはてさて……。どう出てくるのやらのやら。

そこから待つこと数十分。って、完全になめられてるし……。

ようやくあいた門からは、あの空に映し出されていたふてぶてしい男が、

相も変わらないふてぶてしさで近づいてきた。

「お、なんだ。」

人に突き出されて連れてこられたっていうから

眼の色でも無理矢理かえさせられた、哀れな生け贄かと思ったん

だがな。」

そういえば、さっき私を案内した人も、眼にかすかな赤みがかかっていたような……。

無理矢理かえさせられた……か……。今の状況ならあり得なくはないし

あの男に惹かれてここにいて、とか言われるよりは納得できる話ではある。

「私も、映像に出てた男が、あまりにも品がない奴だったからきつと、無理矢理言うこと聞かされてる人なんだろうなって同情してたぐらいなの。まさか、本人だとは思わなかったわ。」

言葉にトゲがあるのは、わざとだ。でも品がないと思ったのは本当。

「がっはっはっは！」

おまえ、粹がっているが、わかっているんじゃないのか？

俺とおまえの年の差は、少なくとも見ても5年はあいてるぜ？」

くっ……。5年とかとだけサバ呼んでるのよ、このオヤジ！でも挑発にはのらない。ここでうっかり10年以上はどうみても差があるでしょ！？

とかいって、無駄に力の差があることを教えてやる必要はない。

「頭の使い方を、あなたが知っているとは思えないんだけど。

500年ぐらいは差がないと、負ける気はしないわね。」

トゲがあるのは、わざとだけど、無理に言葉を考えなくてもスラスラでてくる。

ただ、挑発しているものの、男の顔は相変わらず余裕のままだ。

私に負けるわけがない、と確信しているのだろう。

「500年とは、えらく大きくでたじゃねえか・・・？  
なら、その頭の使い方とやらを教えてもらおうかね！」

男はそういつて、私に向かって攻撃をしかけてきた。

ここは、負けれない。私はあの男に隷属する気はない。

私は・・・私は諦めないと、約束したのだから。あの時あの場所で。

## 「七章・神々の戦い」

私たち異能の者は、超能力のような、強い脳波信号を発することができる。

それらは、超能力としては非力で、武器として使えるようなものではない。

それよりは脳波を入力デバイスとして利用するのが正しい使い方だと思う。

自分たちが作り出した兵器と瞬時に情報をやりとりし、命令をだし、必要な場所に必要なだけ、攻撃を加える。

そういった戦いには、声や手から発し、眼や耳で受け取る情報だけでは

あまりにも少なすぎる。それを、脳波から伝わる大容量の情報で補っている。

この星はあまりにも脆い。加減をせずに攻撃しては自滅するしかない。

星は傷つけず、相手のみを討ち滅ぼす。そのためには膨大な制御が必要だし

その情報は状況に合わせて、刻々と変化する。それらを脳波でやりとりする必要がある。

また、同種同士であれば、お互い相手の脳波も感じ取れるため

相手の動きの読みあいや、そこに的確な力を送り込む早さに勝敗がかかってくる。

あの男が最初に放つ、縮退エネルギーを先読みして消滅させ即座に

相手の脳波を検知する。

あの男が次の攻撃に備えて防御壁とさらにその後の攻撃手段の指示をだそうとしているのがわかる。

もちろん、何となくそう感じるだけだ。でも、力の使い方なんてにたようなものだろう。

人の言葉も、違う国の言葉で意味はわからなくても怒っているか笑っているかぐらいはわかる。

そういうのと同じ感覚かな。

「はっ！」

私の攻撃はあの男が防御壁をつくろうとするのを阻害しそれと同時にあの男に軽い傷を負わせる。

私自身の研究は、あの男のように世界を制圧するためのものではなく、

ただ我が身を守るためだけに行ってきたものだ。

同種の戦いについて何億通りもシミュレートしてきたし、

相手の脳波信号をどうやって妨害し、うち破るかについて様々な研究をしてきた。

一対一の勝負でなら、10年の差があろうとも、遅れをとることはない。

「おっ・・・！」

がっはっは！おまえ、やるじゃないか！

いやいや、悪い悪い、そう怒るなって。ちょっとした遊びじゃないか、な？」

男は、そういうと急に攻撃の構えをといてこちらに、無防備に向かってくる。

ここで、無防備な所を不意打ちしてもいいが、倒せるかどうかは怪しい。

あの男は、私が脳波通信に干渉してきたのを感じ取ったはずだ。それに対してはすぐに対策をとるのは難しいだろう。私でもそれだけで5年は研究している。

だが、私が放つ攻撃は、それほど強いものではない。

あの男は、軽く遊ぶだけでも、この星に穴をあけるぐらいの質量を軽々と召喚させてくる。

本気をだせば、もつと大きな質量すら制御できるだろう。

私の扱うそれは、あの男が遊びで放ったものにすら及んでいない。

先ほどの攻撃も、私が脳波を読み事前に行動できるアドバンテージがあればこそ、

相手の力を相殺できたが、それがいつまで続くかはわからない。

「汗をかいたし、着替えたいんだけど。」

十分目的は果たした。これ以上無理をするのは危険だ。私なりの停戦の意を伝える。

「がっはっは！」

なんだ、女みたいなこと言いやがって！」

これだから品のない男って……。

「私、女ですから。」

「がっはっは、わかってるわかってる。」

そう怒るなよ、な？

数少ない同族だから、男とか、女とか言われてもピンってこなくてな。

おい、リーナ。こいつの世話、任せたぞ。」

私たちが”遊んでいる”間、私を案内してくれた先ほどの女性は呆然と立ちつくしていたが、あの男に声をかけられ、我にかえったようだ。

「か、かしこまりました。

えっと・・・し、システイナ様でいらっしやいましたか。

私をご案内させて頂きますので、どうぞこちらへ」

そついつて城の中にリーナと呼ばれた女性は私を連れて行った。

「システイナとかいったか。

着替えが終わったら話がある。リーナに聞いて、俺の所まで来い。

」

城の中に入ろうとする私に、そう声をかけてきた。

「ええそうするわ。えっと・・・あなた、名前なんだっけ？」

「ぶっ！

がっはっは！おまえ、おもしろい奴だな。

カシスだ。カシス・ミリキュアルだ。

これでも、人間達の間じゃ有名なんだぜ？」

「ああそう。それじゃ、気が向いたらいくわ。」

まだまだ、この男とは仲良くなれそうにない。

## 「八章・休戦」

リーナと名乗る女性に連れられ、1つの部屋に案内される。

外壁はダイヤモンドと非常識な建物だったが内装はおちついた普通の高級ホテルみたいな肝心なっていた。

内装までキラキラしてたら、正直逃げ出していたかもしれない。

「ここがシステイナ様のお部屋になります。

主が認めた者にはここをあてがうように言いつけられておりましたので。」

あの男は、同種がきた時のために部屋を用意していたのだそうだな。なんていうか、見た目によらずマメな性格……。

「こちらに着替えを用意していますので」

そういつて、リーナが指した服はちよつと豪華なパーティードレス。私はあまり服にお金をかける方じゃないからよくわからないんだけど結構、高い奴だと思う。まあ支配者様には値段なんて関係ないんじゃないけど。

「どういうの、サイズあわないんじゃないですか？」

っていうか、普通の服でいいですよ。なんで、ドレス……。

「主からは、サイズはぴったりあうはずだ、と聞いておりますので心配はいらないかと。」

そういつて、リーナはにっこりと笑顔をむけてくる。  
やれやれ……。

つまり、あの男は最初から私が同種であることを知っていて、  
服のサイズがわかるまで調べ尽くして、その上でああいうことをや  
ってるわけだ。

まったく、なんていうか……さ。

観念して着替える前に、先ほどの戦いで少し体も汚れたので  
リーナにお願いして備え付けのバスルームを案内してもらった。

それにしてもバスルームとか、私の家ぐらいの広さあるし。  
支配者ってというのは、どうしてこう、贅沢したがるのかしら。

バスルームでシャワーを浴びて、汗を流しすっきりした所で  
あまり気は進まないが、用意された服に着替えてやる。  
しばらくは、あなたの言うことは聞いてあげるっていう意志表示に  
なる。

忌々しいけど、着替えないわけにはいかない。

「リーナ、あの男、どこにいるか知ってる？」

着替え終わって、しばらくはリーナがいれてくれた紅茶を飲んでく  
つろいでいた。

が、彼女があまりにも何も言わないで、つい私の方から聞いてしま  
う。

別に、来いと言われたからといって、行ってやる義理はないのだけ  
ど、

まあ今後のこともあるし、仕方なくってやつよね。

「カシス様でしょうか。ご希望でしたら、お連れするように言いつかっておりますが、ご案内いたしましょうか？」

「そうですね。お願い。」

私は短く答え、この部屋を後にする。

そのままリーナに連れられて、城という外見とミスマッチなエレベーターに乗り

私はこの城の最上階まで連れて行かれた。

最上階は180度、全面ガラス張りで、城の周りの黄金庭園が見渡せるようになっていた。

遙か向こうには人々がつくった高層ビルの残骸が見える。

部屋の中央にはちょっとしたステージみたいなのがあって、

いくつかの機材が並んでいる。おそらく、大気映写装置だろう。

ここから、あの男は、あのふてぶてしい支配宣言をしていたわけだ。

「がっはっは、なかなか似合ってるじゃないか、ええ？」

男は、ステージから少し離れた所にある、銀の円卓に座っていた。

「あなたの趣味が、あなたの見た目ほど悪くはなくて、安心したわ。」

「がっはっは！気が強い女は好きだぜ、システィナ。まあ座れよ。」

そういつて、男は席の1つを指す。  
私は黙って、その席に座った。

「それで、何か話があるんだっけ。」

私はすつとぼけたそぶりで聞いてやる。

さてさて、この男は何を言いだすのやら……。

## 「九章・混沌の神、戦の神」

「俺たちはこの世界に神となるだけの力をもって、生まれた。なら、神になってやるべきだろうよ。」

人を裁き、人を助ける神様とやらに、な？」

部屋の隅に置かれた銀の円卓は、大気映写装置のステージをちょうど良い距離で見渡すことができる位置にあった。

その銀の円卓に私と向かい合わせに、自らを神と名乗る男が座っている。

その男、カシスは今回の支配劇をそつという言葉で表した。

「おまえはどう思うんだ。俺たちは、何故これだけの力を持っている？」

「この力をどうすればいい？おまえはこの力を何に使おうと思った？」

オーバーな手振りを交えて話すのは大気映写のステージだけではないらしい。

それにしても、この力を、どう使うか・・・か。

この男なりに、考えてはいるようだけど、正解はないと思う。

人を救うため、というのは人の視点での見方だし、私たち別種族においてはおいては

人を助ける、というのはそれほど価値のある言葉ではない。

この男の考えているように、神として支配する、というのも

あながち間違いだはないだろう。支配の仕方が下手だとは思っけど。

「私は特に深くは考えてないわね。」

強いて言うなら、あなたみたいな馬鹿に負けないように

力の使い方を研究していたわ。」

「がっはっは！確かに確かに。

おまえ。実際、歳は20いってないだろ。

それで俺とあれだけ戦えるとか強すぎだぜ？

どんだけ、戦うのが好きなのかとおもったけど・・・がっはっは！  
そうかそうか、俺みたいな馬鹿に負けないように、か。」

馬鹿といわれて何がおもしろいのか、カシスという男はずいぶんと  
楽しそうだ。

「それは、それでアリだな。ええ、おい。

俺たちはいわば、神だ。好きなことをするのが、神ってもんじゃ  
ないか。

結構結構、大いに結構！おまえとは気が合いそうだな、システ  
ィナ。」

そういって、笑いかけてくるカシス。

まあ正直、馬鹿面つていうの。こういうのは。

「私は、気が合いそうとは思わないんだけど。」

「がっはっは、いいさいいさ。

しばらくはこの城にいるといいぜ。

研究に必要なものは、リーナに言えば何でも手に入る。

これからも、俺みたいな馬鹿に負けないう、どんどん強くなっ  
てくれよ。」

そういって、カシスはリーナに合図を送る。

リーナはそれを受けてテーブルに出した紅茶を片づけて

帰る支度を始めたようだ。

「カシス、あなたはこれから何をするの。  
もう世界は支配したし、やることがないのなら、永遠に寝かせてあげましょうか？」

正直、この男は世界を支配した、といっても何か統治してるわけじゃない。

何がしたかったのか、私にはさっぱりわからない。  
統治は人がすること、神がすることではない、と知っているようにだけでも……。

「がっはっは、なになに、これからこれから。」

おまえは、人つてものを何もわかつちやいねえ。  
人は壊しても、壊しても立ち上がってくる。

そして、ある程度までいったら、また道を踏み外すのさ。」

「あなた、それを待つてるわけ……？」

意外と気が長い性格なのね……。」

。「ぶっ！おまえ、気が長いって所に、真面目に感心してるだろ……。」

まあ人つてのは、おもしろい生き物だよな。

俺は、最初に世界の秩序を壊して以来、何もしてない。  
何も害をもたらししていないのに、俺を排除しようと躍起になる。

それで、返り討ちにあつても、俺が悪いつて真面目に思ってるんだぜ？

また、次もくるさ。俺はそれを待って、叩きつぶす。

そうする方が、人間達にとってもいいのさ。」

「やっぱり、あなたとは合いそうもないわね。

寝首をかかれぬように、気をつけておいてね。

「うっかり、殺しちゃうかもしれないわ。」

「がっはっは、うっかり殺すとか、おまえならありそうで怖いぜ、システイナ。

俺のためを思って忠告してくれたんだな、愛してるぜ!」

この男には何をいっても無駄な気がしてきた。

「リーナ、部屋に戻りたいの。案内してくれるかしら。」

円卓から少し離れた位置に控えていたリーナに声をかけて

私は席から立ち上がり、入り口へと向かっていった。

そんな私をみて、しかし慌てることなくリーナはカシスに礼を尽くす。

「かしこまりました。それでは、カシス様。

システイナ様をお部屋にご案内して参ります。」

リーナはそういって、深々とカシスに頭を下げる。

この子、礼とかさういった動作がすごく品がある。

それなりに、しつけのいい家庭で育ったんじゃないのかな・・・。

それがこんな所に連れられてくるなんて、人って本当によくわからない。

「おお、行ってこい行ってこい。」

カシスはそういって、私とリーナを送り出した。

はあ・・・今頃ファイルはどうしてるだろうな・・・。  
私を送り出し、力を手に入れたファイルのことを考え、  
実は私はファイルのことは何もわかってなかったんじゃないだろうか、  
と

不安になった。今更どころでもないのだけれども。

## 「十章・紅眼狩り」

システイナを連れ去られた俺の手元には

いくつかの武器や食料、俺の命令に従う人形のようなものが数体与えられた。

それらを使い、村の仲間と力をあわせて、食料を奪い歩いていた連中を捕らえ従わせ、

貧しい人に食料を分け与え、荒れた田畑を耕し、街を復興させる。

そういうことを繰り返し返しているうちに、この周辺の

以前で言えば国1つ分にはなるうかという広大な地域が俺達の勢力圏のようなものになった。

しかし、他にもそういった力を持つ者が何人かおり

伝え聞くところによれば世界全体で20近くは似たような勢力があるという。

もちろん、それらの全ては紅眼の人間と引き替えに得たものだという。

こうまでして、あのカシス・ミリキュアールが探す紅い眼をもつ人間には

いったい何が隠されているのだろうか。

他の地域では、紅眼狩りを行う集団があるという。

眼の色をみて、赤みがかつたものを拉致し、あの神を名乗る男に引き渡すというのだ。

しかも、最近では眼球を手術して紅い眼を持つ者を作り出した奴ま

でいるという。

しかしそういった噂のある地域はその後、消息を絶つ。

神を欺く者には制裁を、ということらしい。

どちらにしろ、俺はそういう露骨な紅眼狩りには否定的だ。だが、システイナを差し出して力を手に入れた手前、表だってそれを避難することはできない。

そんな時だった。あの知らせが入ったのは。

「フィル総帥、お耳にいれておきたいことが」

公務を終えて、私室とはいっても、公務室の隣にあるのだが。

その私室に入って俺に話しかけてきたのは、俺の参謀のソニア・ウィールズ。

1年前は俺の許嫁ってことになっていたが、ここ最近のバタバタでそういった話はうやむやになり、今はただの参謀として俺を助けてくれている。

「公務中以外は総帥というのはやめてくれないか？

どうにも肩がこって……。」

そういつてわざとらしく首を左右にふる俺を、厳しい目で

ソニアはにらみつける。ちょっと冗談が通じない子なんだよな。ソニアは。

「そんなことを言っている場合ではありません！

見つかったのです！我々の勢力圏で、紅眼のものが……。」

「な、なに……？もう一通り確認はしたはずだが……。」

また、保護目当てのカタリじゃないだろうな？」

俺たちの勢力圏では、紅眼狩りというのはしていない。

だが、紅い眼をもつものを探し、保護するという形をとっている。

そのため、生活が苦しいものが、まれに紅眼をかたつて、保護を求めてくることがある。

単に寝不足で眼が真っ赤、っていう笑い話のような本当の話もあつたぐらいだ。

その笑い話に騙されたのが目の前にいるソニアなので、また今回も、思っていたのだが……。

「ち、違います！今回見つかった少年ですが、眼に傷を負っていたおかげで

眼球が確認できずに前回の調査では対象とはなっていないかったのです。

密偵の調査から、傷を負う前は紅い眼をしていたことがわかったそうです。」

「なるほど……ね。」

わかった、詳しい場所を教えてください。俺も至急そっちへ向かう。」

「はい、よろしくお願いします。」

もし、その少年が”本物”の紅眼であるなら。

あの男、カシス・ミリキュアルが求める秘密がつかめるかもしれない。

その秘密を手に入れることが、あいつをうち倒す唯一の可能性となる。

あの男からの援助を度々うけなくても、俺達はそれなりに力をつけてきた。

幸い、俺たちの地域にはクローン技術に精通した科学者が多く

食料をクローン製法で量産しているおかげで国力としては非常に豊かになっている。

食料は今のようない時代では一種の通貨のような役割を果たすようになった。

必然、食料を多く抱えている俺達は、他の20の勢力と比べても圧倒的に豊かになっている。

そう、いくら紅い眼を持つ者をさしだしても、あの男の裁量で与えられる

” ほどほど ” の武器に頼っていては、いつまでたってもあの男に矢報いることはできない。

我々人の知恵で力をつけていかなければならない。

そのためにも、さらなる力を求めるべく、俺は報告のあった場所へと向かった。

トルトナ村よりもさらに辺境にある、人口20名程度のさびれた集落に

その少年は住んでいた。

今も光の宿らぬその眼は、システイナのものと同じ、深い・・・深い紅に染まっていた。

## 「十一章・禁忌の光明」

寂れた小さな村の一軒家。その屋根裏部屋に  
間借りして住んでいるという少年を俺とソニア、その他  
紅眼の保護チームが訪ねることになった。だが、訪ねた矢先に  
俺達に向けられたのは、温厚な村人達とは異なる、明確な拒絶だっ  
た。

「僕のことには放っておいてほしいんだけど。

君たちみたい人には興味ないし。」

そういつて、ふてくされる少年。歳は12、3ぐらいだろうか。  
両目につけられた大きな傷は、今も痛々しく  
確かにぱつとみでは眼球の確認等無理なようにみえる。

だが、傷跡の合間から時折みせる暗い瞳の周りには  
システイナのものと同じ、紅さで彩られているのがわかる。

この少年の部屋に俺はどことなく近親感を覚えた。  
そう・・・似ている・・・システイナの部屋もこんな感じだった。  
やたらと並ぶ薬品や鉱石の数々。散乱する、難解な書籍。  
そもそも、眼が見えないのに点字も打たれていないこの書籍を  
どうやって読んでいるのだろう。

村人から話を聞いていたソニアからの  
報告も、どことなくシステイナを思わせるものであった。

小さい頃から頭がよく、村の人が病気にかった時は  
よく利く薬草をつかった薬をつくってくれているのだそうだ。

効き目がよく、下手に町の医者にかかるより、よっぽどいいと。

そう、システイナもそうだった。村の誰もが、さすが姫様といって疑いもしなかったが、あいつの薬は時折、効き目が良すぎるがあった。

12、3歳の子供が薬草を処方して、町の医者よりも効果がある？ そんなことは常識で考えればあるわけがない。

だが、小さな村ではそういう非常識がまかり通ってしまう。トルトナ村の時もそうだった。

「君が読んでいる本とか、見させてもらってもいいかな。」

俺は、散乱して使い込まれた本やノートを指さして言った。今の俺は村の中で閉じられた知識しかなかった頃とは違う。中身をみれば、それが”普通の”12、3歳の子供がこの辺境の村で暮らして身につけられる知識かどうかはすぐにわかる。

「さ、さわるなよ！あっちいけよ！」

僕にかまうなっっていつてるだろ！」

小さな子供の抵抗にかまわず俺は本に手を伸ばそうとした。

「や、やめろっ！」

少年がそう叫ぶと同時に俺は、後ろに吹き飛ばされた。

冗談でも何でもなく、吹き飛ばされた。

俺が、自分の半分の背丈もない子供に、だ。

「あ、あつちいけ！あつちいけ！  
あ・・・ああ・・・ほ、ほらみる・・・。  
だから・・・だから嫌だったんだ！」

俺を吹き飛ばした後、少年は混乱して何かを叫んでいた。  
俺の方とはんだ先が、わらふきの壁だったので、かなり痛かったが  
それでも、どうやら無事なようだ。

「フィル総帥、大変です！  
あの男が・・・カシス・ミリキュアールが！」

そういつて窓から見上げた空には、世界を支配した時と同じ  
ふてぶてしさで、神を名乗るあの男、カシス・ミリキュアールが映  
し出されていた。

## 「十二章・魔手」

「いやいや、フィル君とかいったか。

君は大変お手柄だよ。システイナに続き、二人目もまた君の手によって見つけだされるとは。」

そういつて空に浮かぶあの男は、あきらかにこちらをみて話していた。

世界を支配した時とは違い、ごく狭い地域での表示のようだ。空・・・といつても、前回は一面にでかかど移っていたが今回は3階建ての建物ぐらいの場所に映し出されている。

「私の使いの者が、その少年を引き取りに行く。

それまでは大事に保護してくれたまえ。くつくつく。」

あいつ、俺たちが引き渡すつもりはなく保護活動しているのを知っていて、泳がせておいていざとなったら奪うっていつつもりなのか。

くそつ・・・！何かが・・・何かがつかめそうなのに・・・。

「何故ここがみつかったのでしょうか・・・。

極秘に進めていたのですが・・・。」

この辺は監視ポッドが飛んでいないから油断をしていたんだがどうも別の方法で、この場所を検知したみたいだ。そういえば、あの子が俺を吹き飛ばした時・・・。

「くそつ・・・くそつ・・・！」

せっかく、せっかくやりすごしていたのに！」



パシーン！

俺は少年の頬を平手で叩いて怒鳴りつける。

「おまえは、俺たちよりもっと頭の良い奴のはずだ！

冷静に考えろ！連れて行かれたのはおまえだけじゃない！

他にも、おまえと同じように連れて行かれた奴がいる！！」

少年は一瞬怒りをあらわにしたが、しばらくすると

自分の怒りや悲しみをおさせ、冷静になろうとしているようだった。

「おまえと同じように、頭のよかった人間が、

あの男に連れて行かれた。もう1年前の話だ。」

少年は、初めて俺の方を向いて、まともに話す姿勢をみせた。

「名前は……その人の名前はなんていうの。」

初めて、少年から問いかけられた。

やはり、興味をもった……。

俺は半ば確信めいたものを感じていた。

「システイナ。システイナ・ニルファリア。それが彼女の名前だ。

恐らく君がこれから連れて行かれる場所に彼女もいるはずだ。

彼女に……もし彼女に会えたら伝えてくれ。

俺はあきらめていない、と。」

「システイナ……。」

わかった、伝えておくよ。」

そういつた少年の顔は、先ほど泣きじゃくっていた  
年相応の子供のものではなく、知的な達観したものになっていた。

「フィル総帥！神の使いがきました！

少年を引き渡せ、とっています！」

ソニアが慌てて部屋の中に入ってくる。

神の使い、と言えば聞こえはいいが、要求にさからうと  
周囲数百メートルは粉塵に変えてしまっ、凶悪兵器だ。

「言ってくるよ。あんたの名前、フィルでいいの？」

少年は神の使いにも動じることなく冷静に俺に問い掛けた。

「ああ。フィル・ティンクルだ。

後、これがさっき言っていたシステイナだ。」

そういつて俺はあの日以来ずっともっていた彼女の写真を少年に渡  
した。

ちよつと、それを見たソニアの眼が怖かったような気がする。

「わかった。僕はフリオ。フリオニール・ランタックス。

また、あえるといいね。もつといい形で。」

「ああ……そうだな……。」

俺の答えには振り向かず、フリオと名乗った少年は  
神の使いと名乗る、人型のアンドロイドにつれられて、どこかへと  
連れ去られていった。

ふと、俺はある考えが浮かぶ。

「ソニア、この部屋はしばらく誰も通すな。  
至急、調査班と第四研究チームをここに呼んでくれ。」

「はっ？そ、それは可能ですが、  
こ、ここにですか・・・？」

「ああ、ここにだ。大至急、な。」

「わかりました。至急手配します。」

俺がやるうとしていることは、許されないことかもしれない。  
だが、俺はあきらめないと約束したんだ。  
システイナと、あの時あの場所で・・・。

### 「十三章・三人目」

「ねえ、あなたは映像にでるときは、  
なんであんな変なしゃべりかたになるの。」

私は最上階で、映像装置を前にしゃべっているカシスを見てそういつた。

私とカシス以外の三人目の同種が見つかった。それは私もカシスも感じとったことだ。

私たちは自分たちが使う強い脳波をとらえる装置をいくつも持っている。

自分以外の脳波も検出できるし、それが強い力ならなおさらだ。

私もカシスもそれぞれ別のものをいくつももっているが、

その中のいくつかに引っかけかり、お互いがそれに気が付いた。

カシスはさっそく、例の放送の準備をしだしたが、

あいつの監視下にある私は、何ができるわけもなく、

仕方なしに円卓でリーナのいれてくれる紅茶を飲みながら

カシスの大演説を生放送で観ていたわけだ。

「ばっか、あっちの方が支配者らしいだろ？」

俺が素でしゃべったら、素敵なお兄さん、ってかんじがして

神様の感じがしねーだろーよ？」

「はぁ……。」

支配者らしくもなければ、素敵でもなければ、お兄さんでもなければ神様のでもない、つつこみどころ満載のカシスの発言に私はため息でしか答えられなかった。

「こんなのが支配者って、やっぱり間違ってるわ……」

「ねえ私が迎えにいったらあげようか。その子。」

「だめだだめだ。」

「おまえは、しばらく部屋にいる。」

「ここはまず男同士で話をしてからだ。それまでは」

「おまえの部屋があるフロアからはでるんじゃないぞ？」

「まー当然そうでしょうね。私はまあごねるわけでもなく仕方なく従う。いくらでも接触する機会はあるでしょ。」

「カシスとしては、相手がどれだけの力をもつか見極めて、私と組まれても勝ち目があるかどうかを判断したいのだろう。」

「慎重なことだけど、まあ映像をみた感じ、かなり子供みたいだし戦力としてはちょっときついかなーとは思っわね。」

「でも、カシス側につかれるのは面倒だから、それなりに話したいかなー。」

「じゃ、あとでいいわ。」

「大丈夫だとは思っけど、あなた、少年趣味とかないわよね？」

「ぶっ！」

「おまえ、何の心配してるんだよ……」

「さすがの俺様でもびっくりするわ……」

「冗談よ。じゃー私は部屋に戻ってるわ。」

「おう、聞き分けのいい子は好きだぜ、システイナ。」

「はあ……。」

私はため息で返事をして、部屋をでていく。

「な、なんかため息おおいな、システイナの奴。  
た、体調がわるいのかな、な……？」

カシスはそういって、リーナに同意を求めていた。  
はあ……。

自分の部屋にもどって、2時間ぐらいだろうか。  
私はあっけなく、その少年とあうことができた。

「システイナ、いまからでてこれないか？」

あの子供と少し話をしてほしい。

第3応接室にいる。リーナをよこすから、いっしょにきてくれ。」

部屋にある、通信機器……電話っぱいんだけど

カシスの側から一方的に接続できるだけの通信機器でカシスはそう  
告げて

特に説明もなく、通信をきってしまった。

椅子に座ってのんびりと量子デバイスの調整をしていた私は

あまりにも一方的な連絡に、何のことかわからずしばらく呆然とし  
てしまった。

てつきりあの子の説得には一週間ぐらいはかかるかな、って思った  
んだけど

私に会わせるってことは、意外と意気投合しちゃったのかしら……。

「システイナ様、お迎えにあがりました。」

そうこうしていると、迎えにきたリーナの声がドア越しに聞こえてくる。

「わかった、今いくわ。」

私は軽く支度をして、部屋を後にした。

リーナに案内され第三応接室といわれた所に行く。

応接室の豪華な椅子に座つてため息をついているカシスと、部屋の隅の方で自分の首にナイフをあてて、小さく震えている少年が……つてえええ!??。

「ちよつとなんなの、これ。」

カシス、私、確認したわよね。少年趣味はないかって。」

「ぶっ!

お、おまつ! 誤解だつての。

つてか、話を聞いてから判断しろよ、まつたく……。」

「説明……できるの、これ?」

いやがる少年を無理矢理つて図にみえた私は……いや何も言つまい。

「あのな、おまえは……まつたく……。」

いいか、俺にもわけがわからねーが、

このガキはおとなしく城の中までついてきたと思つたら突然、システイナさんをだせ! つていいだしてな。」

「はっ？」

何でこの子が私の名前知ってるわけ……。

カシスの説明に、私はキョトンとするしかなかった。当然、私はこんな子供みたことがない。

「わけわかんねーんだけど、システイナださないと

自分の喉きつて、しんでやるーって行って、ただこねちゃってさ。

こいつ、俺に見つかるの怖くて自分の眼を切り裂いたみたいで、

実際、今度もやりかねないなーって感じなのよ。」

そう言われて、少年の眼をみると、確かに両目に深い傷跡があり瞳の色は一見ただけでは確かめようがない。

なるほど、私はカシスが同種を探しているというあの放送をみて戦う決意を固められたけど、この歳だと、絶望的にもなるわね。

私もこの子と同じぐらいの歳なら、やはり同じことをしたかもしれない。

「し、システイナさんをだせ！おまえはちかよるな！」

カシスが少しでもその少年に近寄ると、少年が真っ赤になって叫び出す。

「な？この調子なんだぜ。」

カシスはやれやれ、といった感じで椅子にもどった。

「あなたの悪人面、自覚する良い機会だと思うけど？」

私はそういつて少年に近づいていく。

「おま、俺のどこが……。はぁ……。」

カシスは放っておき、少年の前にいき、話しかける。

「私が、システイナよ。君とは初対面だと思ったんだけど。」

少年がナイフをぶるぶるとふるわしながら、こちらを見つめてくる。何かの写真と見比べているようだ。

「もう大丈夫だから、少し、私と話そうか。」

少年が私をシステイナとみとめてくれたようなので、優しく話かけてみる。

「カシス、少し席、離してくれない？」

良い機会なので、よけいな奴はおいだしておこう。

「おいおい……。ちえっ……。まあそいつならいつか。

俺も子守は苦手だしな……。」

部屋の外にリーナはおいておくからな。」

そういつてカシスは去っていく。

それを見送った後、リーナも部屋をでていき、扉を閉める。

「話してくれる？私を呼んでくれたわけ。」

そう問いかけると、少年はうんうん、と何度もうなずいた。

いっておくけど、私も少年趣味はないから、ね？

## 「十四章・盟友」

応接室の二人がけのテーブルに私とフリオと名乗る少年は並んで座り、

長い間、お互いの身の上を話し合った。

お互い似たような境遇で育っていたため、話しやすかったのかもしれない。

1時間近くは話し込んでいたと思う。

「ああそうだ。システイナのことを教えてくれた男の人が

俺はあきらめていないって伝えてくれてさ。

確か・・・えっと、フィルって人だったと思う。」

フィルがフリオのいたあの村にいたのは知っていた。

私は見えなかったが、フリオのいる村の映像をみながら

カシスがフィルの名前をわざわざ呼んでいたからだ。

当然、あのオヤジは、私を引き渡したのがフィルだと知っていて、わざと私にその名前を聞かせて、反応を見ようとしているんだけど。

「そう、フィルがそんなことを・・・。

よかった、私も・・・まだ、諦めてないから。」

フリオが不思議そうな顔で訪ねてきた。

「ねえ、そのあきらめてないって何なの？

何をあきらめないの？」

「決まってるじゃない。あの男から解放されること、よ。

これから一生、あのヒゲ面みないといけないかと思うと、うんざり

りだもの。」

カシスは、正直あごひげがやばい。

「でもさ・・・あいつには勝てないよ・・・。」

あいつ、たぶん歳は30越えてるよ。僕なんか倍以上違うんだ。システイナだって、10年は差があいてるだろ？

僕とシステイナの歳を足したって、あいつに負けてるんだ。どうやったって、勝てっこないとおもうな・・・。」

フリオは少しいじけた調子でそう答える。

異能を持つとはいえ、まだ小さな子をこんな目にあわせるのは正直、あまり気持ちのいいものではないわね。

「何も、技術や知識で勝とうっていつてるんじゃないわ。

それに戦いは何も持っている武器の強さだけで決まるわけじゃないわ。

いかに戦うか、という作戦が大事ってことね。

それに当面の目的は勝つことじゃなくて、負けないこと、だしね。」

「勝てないのなら、負けてるってことじゃないの？

勝てないのに負けない、って意味が分からないよ。」

「ふふつ、そうかな。例えば世界中の人間達。

彼らは絶対にカシスには勝つことができない。

でも、負けないようにみんな必死でがんばっている。

人ってそういう所は、本当にすごいって思うわ。

私たちよりも遙かに強い心を持っているかもしれない。」

「そうかな・・・僕は普通の人間よりは強いつもりだけど。」

子供って、こういう所、素直じゃないのよねー。

「あらあら、さっきここで泣いていたのは

どこの誰だったかしら・・・?」

私が意地悪くいってやると、フリオは少しすねてしまう。

「もーそのことは忘れてよ!

システィナ、いじわるだよ!」

「ふふっ、ごめんごめん。」

そんな感じでじゃれあっていると、ドアの向こうからノックが聞こえてくる。

あっ、リーナが部屋の外で待っていたんだっけ・・・。

「お話中に申し訳ありません。」

そろそろ夕食のお時間ですが、どちらでお召し上がりになりますか?」

「じゃあ、私の部屋に運んでおいてちょうだい。」

フリオの分と二人分ね。ちょっとまだ話しておきたいことがあるから。」

「かしこまりました。主にもそのように伝えておきます。」

そういって、リーナは深々とお辞儀をしてその場を後にした。

「ねえ、これからどうする？」

さっそくあのオヤジの対抗作戦でもたてる？」

「そうね・・・最初の作戦は、おいしいご飯を食べてお風呂にはいること、かな。」

「もー！僕はまじめにきいてるのに！」

そっいつてふくれるフリオ。本当にこうしてみると、ただの子供に見える。

「フリオ。覚えておきなさい。」

この城で話していることは、全てカシスには筒抜けなのよ。

だから、これ以上はナイショ。」

「えっ、い、今まで話していたことも全部・・・？」

「そう、全部。あのオヤジ、意外とめざといのよ？」

遠くから、あのオヤジの舌打ちが聞こえた気がした。

## 「十五章・出陣」

別にそういうことを予想していなかったわけじゃない。でも、実際に逃れられない現実を突きつけられると、少しは落ちこんだりもする。

最上階に招集され、銀の円卓でフリオも加えて3人が囲む中、カシスから告げられたのは想像していた事態の中ではそれなりに重いものだった。

「システイナ。これは俺からの命令だ。拒否権はない。

第13地区で反乱が起きている。

いいか、おまえがいつてこの反乱をおこした者を一人残らず処刑しろ。」

せめてもの救いは、この第13地区は、フィルのいる区域ではない、ということだろう。

「カシス！システイナは女の子なんだよ！

そんなことできるわけじゃないじゃない！

ぼくが、それぐらい僕がやるよ！」

カシスと対面に座ったフリオが、反発する。

「ガキはだまつてろ！

いいか、これはおまえみたいな力の弱い奴にはまかせられねーんだよ。

第13地区は、それなりの力を与えてやっていた所だ。

それを奴ら、調子にのって、これで勝てる、なんて思いこんでや

がる。

実際、ロボットをいくら送り込んでもらちがあかねーからな。」

第13地区はかねてから、カシスが執拗な弾圧を繰り返していた地域だ。

そこにとってつけたような理由で強力な兵器を渡して、反乱をおおっている。

つまり、私に始末させるためだけに、こういうお膳立てをしているってわけだ。

「ところで、神の威厳を見せるためにも圧倒的な力をみせておきたい。

そこで、戦上手なシステイナ様に、お得意の作戦で片づけてもらおうってわけさ。」

フリオと話していた内容が、腹立たしくてこういうことしてるなら、まだかわいげがある。

カシスの狙いは、私に全力をださせて、その力量をはかり、反乱を起こされても

完全に押さえ込むだけの対策を立てておくつもりなのだろう。

つまり私が全力をだして戦わなければ、勝ち目がないぐらいの兵器は与えていると思う。

そうであれば、正直フリオには荷が重い。

「別に、どうってことないわ。これぐらい。」

予想していたことだもの。こうなることはわかっていたことだもの。  
。。。

「そうかそうか、そうだろうよ。  
それじゃ、報告をまってるぜ。」

いいか、何度も言うが、反乱を起こした奴は皆殺しだから、な？」

こういう時、このオヤジはとことんウザイ。

「何度も言わなくても、わかってるわ、それぐらい。  
フリオはこのオヤジが人間達の味方をして  
私を殺そうなんて企まないようにみはっていて。」

「がっはっは！」

それも悪くないが、俺はそんなもつたいないことはしねーって。  
おまえにはまだまだ働いてもらっからな。」

「し、システイナ！いいのかよ！こんなの・・・こんなの！  
あきらめないって言ってたじゃないか！」

「ええ、だから、行くのよ。」

私は自室にもどり、戦いのための準備をはじめた。  
あきらめない・・・これぐらいであきらめるものですか・・・。

## 「十六章・肅正」

第13地区の地区境界線にはカシスが配った強化スーツを身につけた数万人々が私を待ちかまえていたかのように布陣していた。

第13地区の人たちが身につけているのは  
ただの強化スーツのようにも見えたが、一人をその手にかけた時、  
その仕組みを知り、吐き気がした。

人が身につけるのではない。スーツの方が、人を身につけ、  
人の意志を操り、人の肉体をエネルギーに変え、人の意志を奪う。  
そういう仕組みになっているようだ。

おそらく一度身につけたら、二度と外すことはできないだろう。

これの、どこが反乱か。

今彼らを動かしているのは、彼ら自身の意志ではなく、カシスが  
あらかじめその兵器に植え付けた、行動基礎ロジックによるものだ  
ろう。

私を試し、神の力を人々に再認識させる。  
そのために、彼らは人身御供として選ばれたのだ。

彼らが完全にスーツに支配され、人としての意志を持たなければ  
まだこの心が痛むことはなかった。

だが、彼らは兵器に心を支配され、肉体の自由を奪われても、なお  
人として生きていた。

私に恐怖し、逃げ出したいのに、兵器に無理矢理、戦わされる。  
その自分自身の矛盾にとまどい、恐れ、苦悩の表情を浮かべる。

最初の数十人を払いのけた所で、標的を見つけたとばかりに一斉に数万の大軍が私に押し寄せてくる。

「せめて、その苦悩を一瞬で終わらせてあげましょう。」

私の慈悲は、ただ死んでいく者達にのみ、ささげられる。

脳波を発し、身につけたティアラがそれを強化し、

私のもつ、細長い、剣のようにも見える時空制御デバイスに大量の指示が発せられる。

半端な火力では、あのスーツに守られ、彼らを死に導くことはできない。

あの兵器は外部火力すら、自らの爆縮機関に転用する仕組みができている。

あの兵器から人を解き放つには、4000度を超す超高エネルギーをスーツの爆縮速度を超える程大量に降り注がなくてはならない。

どうやってこれらの兵器を大量に、彼らに身につけさせたのかはわからない。

だが、第13地区の数万に届こうかという人々が、全て兵器と成りかえていた。

防護スーツといった名目であったのかもしれない。

最初はそれなりに機能するようにしていたのかもしれない。

だが、そんなことは後の祭り。

いま私の前には、大量の兵器が、人の意志をもてあそびながら、せまってくる。

防御性能の高い、これだけの数の兵器を相手にしては私はその全ての力をつかわなければ、この場を納めることはできないだろう。

全てはカシスの思い通り・・・か。

私はさらに脳波を発し、転移デバイスを機能させる。

時空制御で大量の閉鎖空間を作り上げ、そこに大量の熱源を転移させる。

熱源は極限にまで凝縮され、触れた者のみを一瞬で焼き尽くし消滅させる超高エネルギーの固まりへと変貌する。

それらの超高熱源は、私の周りに大量に生成され、彼らに向かって降り注ぐ。

彼らが放つ銃弾、砲撃すら全て塵と化して突き進む。

忌まわしき兵器は為す術もなく、消滅し続けた。

ああ、先に彼らの視界を奪っておけば、この絶望的な光景をみせずにもっと楽に死なせてあげることができたかな、と思ったのは

全ての兵器が灰燼と化し、異臭漂う荒れ果てた荒野で、一人たたずんでいる時だった。

## 「十七章・血塗られた神々」

その厄災は火の雨を降らしながら現れた。

大地は、瞬く間に炎に包まれ、人々は逃げまどう。

人が放つあらゆる砲弾を一瞬で消し飛ばし

大地すら沸騰させる波動を放ち、全てを焼き尽くす。

その者、血の海の中でたたずみ、殺戮を繰り返す。

その瞳と同じ、血塗られた神。

人が初めて目にした二人目の神、

システイナ・ニルファリアは、そうやって人々の心に刻まれた。

カシス・ミリキュールによって編集されたであろう映像は  
だが、どこまでが事実でどこまでが嘘かを見抜くことはできなかった。

実際に、第13地区の方面で恐ろしい業火が降り注ぐ光景は目撃されたし

あそこに数万はいたはずの人は全て跡形もなく消えさっていた。

システイナは・・・やはりシステイナは力をもち、

それが故に、カシスに連れて行かれた。

そして今、彼女はあの血塗られた神に利用されている。

俺が・・・俺が彼女を守る力がないばかりに・・・。

この事実は実用化に向けて迷っていた俺の心を決めることになった。  
この決定が後世にどのような災いをもたらすかも考えずに・・・。

第20地区の研究施設から俺はその衝撃の映像を見てしまった。他の場所であれば、まだ思いとどまったかもしれない。だが、その場所で見ってしまった以上、俺は自分の決断を止めることはできなかった。

「ソニア、試作体の量産に入ってくれ。

後は、制御装置の力が少し弱いのも気になる。

出力をあと10%はあげられないか、調整してほしい。」

俺は表向きは、第20地区の総裁という肩書きだが、裏では、神々に反抗するレジスタンスをまとめている。

ここはそのレジスタンスの研究施設で、とある兵器を研究していた。

「試作体はどれをベースにしたものがよろしいですか？

全て素体の生成まで成功していますので

どれでも量産に入れます。」

俺達の地区ではクローン技術が進んでいた。

表向きは食料を量産するための手段で、それは事実であり欠かせない技術だ。

だが、裏の利用方法もあるってわけだ。

「素体の調達に融通が利くオールドから試そう。

まだまだ試作の領域からでないからな。

チャイルド、レディはオールドである程度成功してからだな。」

オールド、チャイルド、レディはクローンを造るための

素体のコードネームだ。

オールドはカシス・ミリキュアル。

チャイルドはフリオニール・ランタックス。

レディはシステイナ・ニルファリア。

この三人が、現状”神”の力を持つと見なされる者達だ。その全ての細胞を俺達は手に入れている。

チャイルドは、フリオがもっていたナイフの先に微量の血液が付着しており

そこから素体の培養までこぎつけた。

レディはシステイナの部屋から、それと思われる素体が見つかった。その素体にメモされた日付は彼女が村を去ったその日になっている。恐らく、システイナはそういった可能性を考慮して、わざとそれを残していったのだろう。

オールドは、カシスの城に潜伏している  
レジスタンスの一人から手に入る。

潜伏といっても、忍び込んでいるわけではなく

紅い眼をもつ者として神に引き渡された者の一人だ。

連れて行かれても、力をもたない者達は戻ることできず

奴が住まうあの城で給仕として働かされている。

その中の一人がレジスタンスのメンバーだった、ということだ。

「フィル、私たちは間違っていないよね・・・？」

ソニアが、もう長いことフィル総帥と呼んでいた彼女が

昔の口調にもどって、俺にそう問いかけた。

この作戦はレジスタンス内部でも賛否のわかれた意見だ。

人が人を造る、倒すべき敵のクローンをつかって、敵を倒す。

そういった行為が、人道的にも好ましい印象を持たれないからだ。

「間違っているさ、きつとな……」

でも、もうこれしか選択肢がないんだ。今の俺達には……な。」

この間違った選択によって、その後どうなるうとかまわらない。

神の支配から抜け出し、人の尊厳を取り戻す。

神に捕らわれたシステイナの呪縛を解き放つ。

どちらも俺にとっては大事なことだ。

だが、人の尊厳を取り戻すだけなら、こんな非人道的手段をとるべきじゃない。

しかし、システイナを呪縛から解き放つには、これしか選択肢がない。

俺は今、統治者としてはあるまじき、私情を選んでしまっている。

頭ではわかっているけど、俺にはシステイナをあきらめることはできなかった。

## 「十八章・クローン兵器」

私の粛正以降、人はますますカシスに従順となった。誰一人逆らう者もなく、彼をあがめるものすらでてくる程だ。

そう、ただ、1つの地区を除いて。

第20地区は強力な自警団と豊かな国力を背景に神の支配下から完全に独立した国家へと発展していた。

カシスは、実際に反乱がおきるまでは何も動かない。あきらかな敵対勢力となりつつあっても、人が反旗を翻すまで武器を手に取り立ち向かうまでは、何もせずに傍観する。それが、カシスなりの神の定義なのかもしれない。

私たちは神と名乗っていても、人が反乱をおこさなければただ、黙々と自らの知識をたかめるため研究と思考を繰り返すことしかない。

私は相変わらず戦いの研究を続け、フリオは脳波の研究に専念している。

カシスが何を研究しているのかはわからない。私たちが神が誕生する条件と、神を越える力の可能性を探っているようだけど、実際にどこまで何をやっているのかはわからない。

これなら、何も人を支配しなくてもよかったのではないかと思う。カシスは、カシスなりに考えがあるようだが、私にはわからない。

私が13地区を肅正してから3年の月日が流れた。そんなある日、部屋に懐かしいカシスからの一方的な通信が入り最上階に私とフリオが収集された。

「反乱だ。第20地区がとうとう反乱を起こした。」

部屋に入るなり、カシスは単刀直入にそうつげる。

また、私に肅正をさせようというのか。

しかし、その割に珍しくカシスの表情は真剣で余裕がない。

「ふーん……。ここ最近は静かになったと思ったんだけどね。

で、カシスは誰に肅正させる気なのさ。」

あのころよりは少し、子供っぽさの抜けたフリオが、冷めた口調でカシスに問いかける。

「今度は全員でいく。真剣にかからないと、俺ら全員殺されるぞ?」

カシスはいつになく真剣な表情で答えた。

「どうしたのさ。人相手にカミサマともあろう人が、

いやに真剣じゃないか。」

カシスらしくないのは確かだ。今までは人の反乱を楽しんでさえいた。

それは、人には絶対にまけないという確信があったからだろう。だが、いまはそれが失われている。

私ですらまだカシスとの差をうめられずにいる。

人がわずか3年でどれだけのものをなしたのか、興味はある。

「奴らに、俺の武器がいくつか盗られている。それらを使われて攻めてこられたら、ちょっとやばいかもしれねえ。」

カシスの武器を盗る・・・？ああそういう発想はなかったわね。

私たち異能の者は、みな脳波をつかってデバイスを操る。

でも、その脳波というのは十人十色。それなりに似ている所はあっても

やはり細かなデバイスの制御をするためには、違いが大きすぎると言わざるを得ない。

つまり、私ではカシスの武器は操れないし、その逆もまたしかり。

脳波ってのはそうそう変えられるものでもないし、私はあきらめていた。

でも、それは人も同じ。というより、脳波の微弱な人にはとてもデバイス制御に必要な出力はだせないと思うのだけれど・・・。

「武器を奪われたって、脳波パターンがあわなきゃただのガラクタだろ？」

それに、人の脳波で操れるわけないじゃん。」

フリオが私も思った疑問を口にする。

「クローンだよ、クローン。」

あいつら、俺様のクローンをつくりやがった。

同一体なら脳波がほとんど一致するから、俺のデバイスなら簡単に扱えるんだよ。」

クローン？対抗の手段としてその可能性は考えたけれど、実用化するにはまだはやいと思う。

神の存在を気づいたのが3年前。そこから培養したとしても、たった3年で戦力となるまでには育たないんじゃないか……。

「ああ、クローンから脳波だけを抽出するようにしたのか。うへ……よくやるね、そんなこと。」

フリオが苦々しい顔をした。脳波を抽出……。つまり、生後まもないクローンから脳髄を摘出して脳波を発生させるための機械として、生かさず殺さず利用する、ということだろう。

常識では考えられない非人道的な兵器。

それを第20地区……フィルの地区でつくられた……。

……いや、私が彼らを非難することはできない。

私たちこそが、彼らに耐え難い恐怖をあたえ、そこまで追いつめたのだから。

「わかったら、おまえらもとつと準備しろ。」

いいか、俺様の放送では、世界を支配しているのは

俺ら3人つてことで人間達に植え付けてるんだ。

今更、裏切ったって、人間共は受け入れちゃくれねーからな。」

カシスはよほど追いつめられているのだろう。

彼にとって予想外の事態に余裕を完全になくしているようだ。

「ちえっ……カシスのへまの尻ぬぐいじゃないか。

武器をとられるなんて、間抜けすぎるんだよ。」

フリオがカシスに聞こえないよう小声でつぶやきながら部屋に戻っていた。

私も自室に戻り、準備をしよう。

カシスを裏切るのはいつでもできる。その前にフィルにあっておきたい。

この非人道的な兵器を、彼がどういう気持ちで生み出したのか。

もし、この兵器を平然と生み出せる者が支配者になるのであれば、それは、カシスが支配していた頃よりも、なお恐ろしいことだ。

人が人を支配すれば良い、とは思わない。

人であっても、神であっても、そこに恐怖のない世界がきてほしい。

フィルとの約束を誓ったはずなのに、私の心には、迷いが生まれていた。

私があきらめなくなかったのは、なんだったのだろうか。

今はその答えが見えなくなってしまった。

## 「十九章・神速」

第20地区からカシスの住まう城に  
武装した3名の人間が攻め込んできた。  
私たちは黄金庭園にてこれらを迎え撃つことになる。

手に持っている武器はカシスから盗んだ出力デバイスだろう。  
頭に大きめのヘルメットのようなものをかぶり、顔全体を覆っ  
ている。

あの中にクローンをいれて脳波をださせているのかもしれない。

「なんだ、意外と数はすくないね。」

「これなら、そんな大騒ぎする程のことはないんじゃないの。」

フリオは楽観的な様子でそう答える。

「敵を倒すのは俺とシステイナでやる。」

「おまえは、足止めが精一杯だと思っぜ。」

「せいぜい、死なないようにしろよ。」

「はあ・・・私も足止めがいいんだけど。」

「ねえ、カシス。」

「あなたが盗まれたデバイスってどついう機能があったの。」

「カシスの力をしっておく良い機会だ。」

「それに聞いておいた方が戦う際に断然有利だ。」

「・・・未来予見だ。」

周囲の原子配置を完全に分析し、ほとんど誤差なく未来を予測する。

おまえとやりあった時に反応速度については勝ち目がなかったかな。

そのためにつくったんだよ。」

私たち同じ力を持つ者同士の戦いは、相手の動きを正確によみ、そこに適切な力を、迅速に送り込める方が勝機を掴む。

力の加減や転送速度は、デバイスの力に依存する。

カシスのものが最も優れており、私のものはそれにやや劣る。

フリオのデバイスは私のものよりも、さらに劣る。

一度に転移することができるときの力の数は、脳波の強さとそれを強化するデバイスの性能に依存する。

これは元々の脳波が強いフリオが優れており、私とカシスは同程度だ。

先を読む力は、補助デバイスの力と、その者の才能で決まる。私たちの中では、私が最も早く、カシス、フリオの順になる。

カシスはその、先を読むための力を補うために

新たなデバイスをつくったようだが、まぬけにもそれを盗まれたのだそうだ。

「問題は、彼らのクローンが

そのデバイスの力をどれだけ引き出せるのか、って所かしら。」

「まあここまでできたら、もうやるっきゃねーだろ。」

カシスはそういうと、目の前にいる3人に向かい大量の力を送り込む。

だがすでに、カシスが力を出現させようとしたポイントには転移を無効化させる暗黒物質が一足早く彼らによって設置されていた。

同一地点に転移させる、等という技はねらってもできるものではない。

その座標をあらかじめ知っておかなければ、できはしない。

これが、未来予見だというのが。

「ちよつ、よ、読まれてる！」

僕の攻撃も全部、無効化されるよ！」

フリオは力の数は弱いが大量の転移を同時に行使できる。

その全てが、転移を無効化されるか、即座に消滅させられている。

カシスのデバイスが、未来予見という方向に向かったのであれば、私は彼との戦いにおいて、負けることはないだろう。

デバイスの性能や、脳波研究においてはカシスが格段に優れているが技術力と、戦いのための技術というのは、また別なのだろうか。

「あなた達、なさけないわよ。」

私はそういうと、一瞬の後に、相手がかぶっているヘルメットのみを消滅させる。

「お、おまえ、なんだその力……。」

カシスが驚いたようにこちらを見ている。

転移の早さ、転移させる数、先読み。

それに共通して言えるのは攻撃や防御にかかる時間の速さである。この速さを高めるために、先読みをカシスはとった。

だが、私にはそれは驚異でも何でもない。

相手が先を読む前に動けばいい。

動く速さが同程度にまでなつて、初めて先を読むかどうか、という話になる。

私が3年の間に研究していたのは、速さを極限にまで高める方法。目でとらえていては間に合わない。

目でとらえた情報をそれが脳に届くよりも速く脳波で自分に伝える。

相手の攻撃をさけるためには座標を固定してはならない。

常に自分の座標を高速で変化させ続けるために自らを転移させ続ける。

転移座標は常に、現在の状況をみて判断しなければならない。

そついう速さを積み重ねることが、先が読めていても

それに対処できないだけの速さを生み出す。

私は早々と二人目をうち倒していた。

## 「二十章・再会」

私はさつきから、微動だにしない最後の一人。  
忌まわしきクローン兵器を身につけた人を見据え、訪ねる。

「あなた達をまとめていた、フィルという男に会いたい。  
今、どこにいるのか教えてくれたら、あなたのことは見逃してあげる。」

目の前の人があるより先にカシスが怒鳴りあげる。

「システイナ！てめえ、なにしてやがる！  
こんなやつさつさと始末しろよ！」

「カシス、技術はまだまだあなたの方が上だけど、  
今の戦いを見ていたら、私あなたに負ける気がしないんだけど？」

私が凍えるような紅い眼で、カシスをにらみつけてやると  
カシスは少し、ひるんだ様子を見せる。

カシスがまだ何か言いたそうにしていると、目の前の人がある。

「俺だよ、システイナ。」

「こんな風になるとはおもっていなかったんだけどな。」

そういつて、目の前の人ヘルメットを脱ぎさった。  
そこにいたのは、紛れもないフィル・テインクルその人だった。  
私が忘れかけている、人の心を唯一つなぎとめてくれる存在。

「フィル、あなたに聞いておきたいことがあるの。」

フィルは黙っている。私はかまわずに問いかける。

「あなたが身につけているその出力デバイス。

それを操るためのクローン兵器。

それらはあなたの意志で、それは実現したものなの？」

「そうだ。俺の意志だ。

こんな手段をとることですか、俺はおまえを救う力を手に入れられなかった。

これが汚れた、間違った手段であることはわかっていた、

でも……それでも、俺はおまえをあきらめきれなかった！」

彼のまつすぐな眼は、昔と変わらず私を見据え、心を捕らえる。

ああ、これが……私はこれが見たかったのか。

なんと単純なことか。

「おれと……俺と一緒にきて……くれるか？」

フィルの問いかけに、私は今身を委ねる。

これは逃げだったのかもしれない。

彼は、私を救うためにあの忌まわしき兵器をつくったという。

自分の欲望を満たすため、他者の尊厳を踏みじり、利用する。

その程度の器の人間を長として、世界がうまくまわるわけがない。

人の幸せを望むべくあれば、今の方がまだ見せかけの幸せを享受できるであろう。

でも、これは理屈じゃない。

私は……私の存在は誰にも受け入れられないと思っていた。

この忌まわしき力が故に。

どこかでフィルも私のことを恐れているんじゃないか、そう思っていた。

でも、そうじゃない。私の力をしって、受け入れ必要としてくれる。私が必要としていたのは、ただそれだけのことだった。

神の力をもつてはいても、欲していたのは、ただそれだけのことだった。

「カシス、あなたはイヤな奴だったけど、それほど嫌いじゃなかったわよ。」

私は今までの友にわかれをつける。

嫌な奴とはいえ、世界で3人しかいない同種の一人。もうあえないと思うと、少しさみしくもある。

「けっ、なんだよ、それは。」

「なんなんだよ・・・これは・・・。」

カシスの眼にはあきらめの色がみえた。

「俺は、これでもおまえのことを・・・。」

「けっ、なんだよ。そんな優男のどこがいいんだか。」

私は出力デバイスを彼に向ける。

カシスはそれを見ても抵抗の構えすらしない。

この距離で私の速度で攻撃を放てば、カシスでは防ぎようがないだろう。

「カシス、お互いの歳がもっと近ければいい仲間になれたかもね。」

「いつてるよ……。」

はぁ……意外と早くおわっちまったな。

俺の祭りは。もっと派手にやっておくんだっただぜ……。」

フィルの元に下るのなら、彼は生かしてはおけない。

私の神速は私の涙が流れ落ちるより早く、彼の命を奪い去った。

カシス・ミリキュアル。

世界で最初に神の力をもって生まれ、世界を支配した混沌の神。

その最後は、あっけなくも、潔いものであった。

## 「二十一章・戦犯」

システイナとフリオは、我々に降り、カシスは死んだ。人を支配していた神はいなくなり、人は自由を再び勝ち得た。

だがそれは、人類の自由であって、俺の自由ではないことをこの後、痛感することとなる。

システイナとフリオは、神の力を持つ者として俺の弁護の甲斐もなく、全身を拘束され地下牢に幽閉された。

戦後処理を行う会議の中では、彼ら神の力を持つ者はS級戦犯として扱われ、どう殺すべきか、という処刑を前提とした話し合いが行われていた。

人は何故こつも醜くなれるのだろう。

自分たちが受けてきた苦しみを、何故苦しめた者にも与えたいと願うのだろう。

S級戦犯である二人をかばい続けてきた俺は総帥という地位にありながら、その発言権を確実に失いつつある。人道に反するクローン兵器も俺の一存で計画して実行したことになつており

俺自身もA級戦犯として、裁かれるかもしれない。

次の総会で、総帥解任の動議が提案される動きがある。そうなったら、俺はあつという間にA級戦犯になつて、処刑まっしぐらつてわけだ。

これを裏で操っているのが、長い間俺をささえてくれたソニアだと

いうのだから  
人生何があるかわからないものだ。

俺は、総帥としての権限が失われないうちに行動することにした。

「これはフィル総帥！

何かご用でしょうか。」

地下牢の警備兵が俺をみるなり敬礼の構えをとって話しかけてくる。俺の地位が危ういというのは上層部だけで進められている話でこういった末端の立場では、俺はまだまだ英雄扱いしてもらえら  
しい。

「ちょっと、地下に降りてみたいんだけど、頼めるかな。」

「はっ・・・ですが、委員会の方より

例え総帥であっても、ここは誰も通すな、と言われておりますの  
で・・・。」

「馬鹿、それは例え話だろう。」

俺がこの国の中で入れない所なんて、あつていいはずないだろ？」

「確かに。委員会の方は少し神経質になりすぎなのですよね。

聞けば神々は、あのカリスというのが一番やっかいな奴で

残りの二人はカリスが倒されるとすぐに命乞いをしてきたとか。

いやはや、これもフィル総帥の武勇あつてこそ、ですな。」

一体、どういった話になって広がっているのか。

あの時とまったく異なるその武勇伝を苦笑いで聞きながら

俺は兵士に案内され、地下牢へと降りていく。

厳重な扉をいくつも抜けた先に、全身を拘束された  
システイナとフリオがいた。

「ありがとう。しばらくこいつらと話をしたいから、  
おまえは外で見張っていてくれるかな？」

「はっ・・・しかし、フィル総帥に万ーのことがあったら・・・。」

「俺が拘束された二人にやられるぐらいなら、  
どうやって、俺はカシスを倒して二人をここへ連れてきたんだ？」

「確かに、そうですね。」

「それでは、私は外で待機しておりますので、  
何かあればお声かけください。」

「ああありがとう。」

警備兵は、疑いもせず外へでていった。  
まあ総帥っていう肩書きを使うのも、これが最後になるかな。

俺は警備兵がでていったのを見計らい二人の拘束具を外しにかかっ  
た。

## 「二十二章・脱走」

「まったく、君たち人間っていうのは  
カシスなんかよりもよっぽどたちが悪いよ。」

フリオが拘束具の痛みがまだとれないのか、  
苦悶の表情を浮かべながら、ぶつくさと文句をたれる。

私も長い間拘束されていたため、体の感覚がついてこない。  
ふらふらとよろめきながら、フィルに肩をだかれ、支えてもらう。

「疲れている所わるいが、すぐにここを離れないと。  
おまえ達は、いつ処刑されてもおかしくないんだからな。」

「まったく、カシスを倒せたのは誰のおかげだと思ってるんだよ。  
君たち人間じゃ何もできなかつたくせにさ。  
ちえつ。こんなことなら、おとなしくつかまるんじゃないか。」

「ほら、フリオ。文句いってないで支度しましょう。  
フィル、何か武器になるようなものはないかしら。」

神々とはいつても、人と同じように素手では大した力もない。  
武器をもってはじめて、神たる力を振るえるのだ。

「こんな場所にたいそうなものはもってこれなかったが、  
ほら、この簡易デバイスぐらいならあるぜ。」

「はぁ・・・私たちにしたら、こんなのおもちゃみたいなものなん  
だけど・・・。」

まあ何も無いよりはいいか……。」

「おもちゃって……それを造るだけでも……はあ、まあいいや。さあとりあえずおまえ達を連行するって感じにするから。ほら、それっぽくしてくれよ。」

ゆるゆるに拘束具を再度つけなおして、それなりに連行されているような形になる。

こんな手にダメされる人っているのかしら……。

「やや、フィル総帥！どうされました！」

後ろの二人は牢につないでおきませんと、危険ですよ！」

「この二人はこれから処刑を行うことになったため  
私自らつれていくことになった。」

「なんと！そのような役目は私がいたします！  
フィル総帥がなさらなくても……。」

「ゴホン。これは、人が偽神を断罪するという、  
神聖な儀式の一環であり、総帥自らが行わなければならない仕事  
なのだ。」

君の心遣いはありがたく受け取っておく。」

「こ、光栄であります！」

神聖な儀式に立ち会え、私は感激しております……！」

まあなんていうか、騙す方も騙される方も……。  
直立で敬礼して私たちを見送る警備兵を後に  
私たちは足早に牢屋を抜け出す。

牢屋から抜けたら普通の服に着替えて、眼を隠せば

普通に歩いていても見つかることはない。

このまま、この場を切り抜けられるかと思ったその時だった。

彼女が私たちの前に立ちはだかつたのは。

## 「二十三章・選ばれなかった者」

クローン計画には2つの側面がある。

1つには、我々では扱えない脳波入力デバイスを扱うため、クローンの脳髓のみを使い、脳波出力デバイスとして利用する。

こちらは、結果を急ぐためにとった邪道で、本来は神のクローンを育てて人に味方する神を創り出そうとしたのだ。

ソニアは、そのクローンを10名程連れ出して俺達の前に立ちはだかった。

クローン達はその歳が3歳程度であっても、すでに我々の中でも一番知識があり、脳波レベルも高い。神と呼ぶにはまだか弱いが、人としてならば、誰よりも優れている。

「フィル総帥、監禁中の神々をつれて、どちらへ行かれるのかしら。」

ソニアの口調は今までにない冷たいものだった。

「まだ、おれを総帥と思っているのならここは何も言わずに通して欲しいんだけどな。」

「ああそつね……。S級戦犯を脱走させたのだからたとえ、総帥であっても、罪は罪。」

この場で、総帥の座は解任ってことでいいかしら。」

システイナとフリオは、すんなり通してくれないとさ」と  
拘束具を外し戦闘の構えをとる。

先ほど、システイナに渡した簡易デバイスは、  
目の前にいる幼いクローン達がつくりだした試作品だ。

当然、この10名のクローン達も同じものをもっている。

「リリア、みんなと協力して

あそこの三人を捕まえなさい。」

リリアと呼ばれたクローンの子供が、他の子供を引き連れて  
こちらに向かってくる。女であるからシステイナのクローンである  
う。

「やだやだ、子供の自分を相手にするなんて……。」

まったく、なんだってこんなことになったのかしらね。」

システイナにしてみれば、目の前のクローンは  
自分の子供の頃にうり二つなので、複雑な気分であろう。

「システイナ、僕も手伝おうか？」

「子供相手に、二人がかりとか大人げないからいいわ。」

フリオは確かにデバイスがないから、力にはなれないだろうが、  
それにしても、一人で大丈夫だろうか……。

「おい、あいつらを子供と思って甘く見ない方が……。」

「最初に言ったでしょ。あの子もってるデバイスなんて、

おもちゃみたいなものなのよ。」

システイナがそういうと、ソニアがクローン達をせかした。

「ほら、リリア！さっさとあの女をころしちやいなさい！」

リリアがうなずき、システイナに向けてデバイスを向ける。だが、それらは一向に反応しない。

あれ、どうしたんだ・・・何故何も起きない・・・？

「その子が私のクローンっていう時点で、もうあなた達に勝ち目はないのよ。」

1つのデバイスに2つの同じ脳波が入力された場合、より強い脳波の方が優先される。

つまりは大人と子供の違いって奴ね。わかって頂けたかしら？」

そういつて、クローン達もっているデバイスがその持ち主自身を攻撃した。

「くっ・・・こんな・・・こんな！」

また・・・またあなたに負けるなんて！」

ソニアは動かなくなったクローン達を前に泣き崩れる。

「システイナ、あなたさえ・・・あなたさえ、いなければ・・・。フィルはずっと、私のそばにいてくれたのに・・・！」

せつかくあの偽神に連れて行かれて、もう私だけのものになったと思ったのに・・・！」

システイナはそんなソニアを、嘲るでもなく、庇うでもなく、

ただ無表情にみつめていた。

「いきましよう、フィル。」

人が集まってくるとやつかいだわ。」

「あ、ああ……。」

システイナは、俺が返事をする頃にはもう歩き出していた。  
俺とフリオが彼女の後に続く。

「ちえっ、こんどはあんたの色恋沙汰に巻き込まれるなんてさ。  
まったく、こっちは良い迷惑だよ。」

フリオが俺に聞こえるようにぼやいてくる。  
俺とソニアは確かに婚約者ではあったが、親が決めたものだし  
彼女もきつと迷惑がっているだろう、と勝手に思いこんでいた。

だが、彼女はそうではなかったようだ。  
システイナが憎らしい程には、俺のことを思っていてくれたようだ。

彼女が俺を選んだように、俺はシステイナを選んだ。  
ただ、それだけのこと。

それだけのことなのに……、俺の心は尖った針で突き刺されたよ  
うに

激しく、鋭い痛みがまとわりついて離れなかった。

「終章・人の尊厳」

「これからどうするの？」

フリオが、私たちに問い掛ける。

「そうね、人がいる所にはもう住めないし  
どこか、誰も住んでいないような片田舎で  
のんびりと暮らすことにするわ。」

「ふーん……。」

ねえ、僕も付いて行っていい？」

フリオはそう、私に問い掛ける。

彼とも、ずいぶん仲良くなったし、最後の同種でもある。

「ええ、もちろんいいわよ。」

「だってさ、フィルさんだっけ。」

いつまでも、さっきのおねーさんのことばかり考えてると  
僕がシステイナ、もらっちゃうからね。」

フリオが、そういつてフィルを挑発する。

フリオなりに、フィルを元気づけようとしてくれるのだろう。  
トルトナ村にいたころにはソニアがあんなに取り乱したのは  
一度もみたことがなかった。

フィルも、それなりにシヨックだったのだとは思っ。

私は、もう人の感情にはずいぶんと疎くなってしまったので

何も感じることはなかったのだけど、フィルはいろいろ思う所もあったのではないか。

「フィル。あなたはどうするの？」

あなたは人間だし、私たちみたいに、隠れて暮らす必要は……。

「

その言葉を言いきらないうちに、フィルは私の言葉をさえぎった。

「馬鹿！一緒にいくにきまつてるだろ。」

ソニアのことは、俺の中では最初から答えがでていたことだ。

もう、ふっきれてるよ。」

全然ふっきれてはなさそうだけど、彼がそういうなら、そうなのだろう。

「そう。じゃあ、私がフリオに乗り換えないように、

しっかりと、私をつなぎとめておいてくれる？」

「いっただろ、俺はおまえのこと、あきらめないってな。」

そうして、私たち三人は、人里離れた山奥でひっそりその生涯を全うした。

その後、人々は優れた才能をもつ神のクローンを大量に生み出し彼らの優れた知識を利用するようになった。

技術水準は飛躍的に向上したが、それらの内容は人の理解を大きく超えており

人は何をするにも神を頼らなければならなかった。

それ故に人は社会で活躍することはなく、社会的な地位はどんどん低下していった。

やがて、種としての人は社会の底辺へと追いやられ、神の子孫らが世界を支配するようになった。

神との戦いに勝利し、人としての尊厳を取り戻したはずが、その尊厳によって、人は自らより優れた神に、支配者の座を譲ることになったのである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3532ba/>

---

その瞳は血に染まり

2012年1月9日05時03分発行